オルダス・ハックスレー『クローム・イエロー』(翻訳⑤)

Aldous Huxley, *Crome Yellew* (translation ⑤)

桑原加代子
Kuwahara Kayoko

第20章

アイヴァーは帰って行った。黄色のセダンの風防ガラスの後ろにもたれ掛かって、イングランドの田園地帯を駆け抜けて行った。社交上のあるいは恋愛上の急用が、彼をある館からある男爵の館へ、ある城からまた別の城へ、エリザベス朝の邸宅からジョージア朝の邸宅へと、この王国のいたるところへ呼び寄せるのだった。今日はサマセット[1]、明日はウォーリック[2]、土曜日はウエスト＝ライディング[3]、火曜日の朝までにアーガイル[4]へと、アイヴァーは少しも休まなかった。七月始めから九月の終わりまで一夏中、自分の用事に没頭していた。彼は、こういったことの殉教者だった。秋になると休暇のためロンドンに戻った。クローム屋敷での出来事は、ちょっとした事件、彼の人生の流れに浮かんだ一瞬の泡沫に過ぎなかった。すでに過去のものだった。お茶の時間にもうゴブリイに行っているだろうし、ゼノビアが嬉しそうに微笑んでいるだろう。そして、木曜日の朝には――しかし、それはずっとずっと先のことだ。木曜日の朝のことは、そのときになって考えればいい。それまではゴブリイに、そしてゼノビアが。

こういった訪問におけるいつもの習慣通り、アイヴァーはクローム屋敷の来客名簿に、詩を一篇書き残していた。出発の十分前に、堂々と即席で作ったのだった。デニスとスコーガン氏は、彼に最後の別れを告げて、中庭の門から一緒にぶらぶら歩いて戻って来た。玄関の机の上に来客名簿が開かれたままになっていた。アイヴァーの作品が目に留まった。インクはまだ乾いていなかった。スコーガン氏が大声で読んだ。

夜の鉢にかけた
あの太古の諸王の魔法は、
万物の魂の中に眠る。
紺碧の海の中にも、アクロセローニアの頂にも

瞳のような蝶の翼にも
世捨人たちの酒宴の幻の中にも
歌いながら飛び、飛びながら歌うものの中にも
雨の中にも、苦痛にも、幽かな喜びの中にも。
だが、これより強大な魔法が、はるかに強い呪文が
ここ我が魂の回りで、その魔術を織る。
クロームは、晩鐘のように我を呼び
幽霊の住む墓地のようにつきまとう。
運命は我をここから引き離す。無情な運命よ！
クロームから遠く離れてからは、故郷を思い出して
我が魂は涙するであろう。

「とても上手だ、上品でうまい」スコーガン氏は読み終えると言った。「ただ、蝶の翼というのだけがわからない。デニス、君は詩人の心の動きについては直接知っているだろうから、説明できるだろう。」

「これ以上簡単なものはありませんよ」デニスは言った。「美しい言葉です。アイヴァーは、翼の色が金色だと言いたかったんですよ。」

「なるほど。」

「僕たちは」デニスは続けた、「美しい言葉が、必ずしも美しい意味を持たないという事実に随分悩むんです。例えば、“carminative”という言葉が、思っていた意味でなかったというだけで、最近、詩を一篇すっかりだめにしたんですよ。carminative、美しい言葉だとは思いませんか？」

「美しい」スコーガン氏は同意した。「で、どういう意味なのかね？」

「小さいときから、大切に暖めてきた言葉なんです」デニスは言った。「大切にして愛してきたんです。僕が風邪をひくと、家族はよく肉桂をもって来てくれました——役には立ちませんでしたが、嫌ではなかったんです。小さな瓶から一滴ずつ注ぐんです。金色をした液体で強烈で、焼けつくようでした。瓶のラベルには効能がずらりと書いてあって、特にcarminativeとして最高の効きめあり、となっていました。この言葉がとても気に入り、薬を飲むときはいつでも『この薬はcarminativeではないか？』と、独り言を言ったものです。肉桂を飲んだ後に感じる、体の内側から暖かくなる感じ、あのほてり——えぇと何と言ったらいいかな？——肉体的自己満足感を非常にうまく表現しているように思えたんです。大人になって酒の味を知ったとき、“carminative”という言葉は、酒が肉体と精神に与えるものよりもはるかに崇高で精神的なほてりを示しているのだと、僕には思えました。ブルゴーニュ産のワイン、ラム酒、古いブランデー、ラクリ

マクリスチ[5]、マルサラ[6]、アリアティコ、スタウト、ジン、シャンパン、クラレット、その年のトスカナ[7]の新酒——こういったものを比較し分類しました。マルサラは薔薇色で穏やかにcarminativeで、ジンは暖まるあいだちくちくして爽快になる。carminative価値の総目録を作りました。それが今になって」——デニスはがっかりしたように手のひらを上に向けて、両手を広げた——「今になって、僕はcarminativeの本当の意味を知ったんです。」

「それで、どういう意味なんだね？」スコーガン氏は少しいらいらしながら尋ねた。

「carminative」デニスはその言葉をゆっくりと、いとおしむように言った、「carminative——僕はなんとなく、謝肉祭や深紅色という言葉のように、歌とか淡紅色など、その派生語に関係があると思っていたんです。carminative——この言葉には、歌とか、薔薇色の暖かい肉体を思わせるものがあり、四旬節の遊楽日[8]やベニスの仮装休日を連想させるものがありました。carminative——暖かさ、ほてり、内面の成熟さ、こういったものすべてがこの言葉の中にはありました。それなのに…」

「要点を言ってくれ、デニス」スコーガン氏は抗議した。「要点を頼む。」

「ええ、先日詩を一つ作りました」デニスは言った。「恋の効果についてです。」

「そんなもの今まで誰でも書いているじゃないか」スコーガン氏は言った。「別に恥じることはないよ。」

「僕はこういう考えを出したんです」デニスは続けた。「恋の効果は酒の効果に似ている。愛の神エロスは、酒の神バッカスと同じように我々を酔わせる。例えば、恋は本質的にcarminativeである。恋は暖かさ、ほてりの感覚を与える。

そして酒のようなcarminativeな情熱が…

これが、僕の書いたものでした。この一行は上品な響きがするだけでなく、とても適切で的を得た表現だと、自惚れていました。すべてが、このcarminativeという言葉の中に集約されていました——ある一つの考えについての、詳細で正確な前景、はかりしれない無限の奥地がです。

そして酒のようなcarminativeな情熱が…

僕は、悪くないと思いました。そしてそのとき突然、今まで一度も実際に、辞書でその意味を調べたことがないことに気がついたんです。carminativeという言葉は、あの肉桂の瓶の時代から僕と共に育ってきました。その意味については全く疑ったこともありませんでした。carminative、この言葉は僕にとっては、その内容において非常に豊かで精

巧な芸術作品と同じでした。人物の描かれている完璧な風景画でした。

そして酒のようなcarminativeな情熱が…

僕がこの言葉を使ったのは、この詩が初めてでした。そして突然、辞書の確認が欲しくなったんです。小さな英独辞書――手元にあったのはこれだけでした。僕は、c, ca, car, carmとページを繰っていきました。ありました、“carminative”すなわち『駆風剤』と『駆風剤』ですよ！」彼は繰り返した。スコーガン氏は笑った。デニスは、首を横に振った。「いいえ」彼は言った、「僕にとっては笑いごとではありません。僕には一章の終わり、若く貴いものの死でした。こんな時代もあったんです――幼く無邪気な時代が――carminativeは、carminative以外の何物でもないと信じていた時代がです。そして、僕にはまだ人生が残っています――carminativeが、駆風剤という意味だったということを知ってからの一日か、多分十年か、半世紀かが。

かつての我にあらず
また未来の日が存在することもなし

人を憂鬱にする真実です。」

「carminative」スコーガン氏は考え深そうに言った。

「carminative」デニスが繰り返し、二人はしばらく黙っていた。「言葉というものを」デニスはやっと言った、「僕が言葉をどんなに愛しているか、おわかりになりますか。あなたは単なる物や思想、そして人間のことで頭が一杯だから、言葉の本当の美しさがわからないんですよ。あなたの心は、文学的ではありません。グラッドストン[9]が『マーゴット』という名前に対して、三十四篇の詩を作ったということは、あなたにとっては何よりも痛ましく思えるでしょう。韻文で宛て名が書いてあるマラルメ[10]の封筒には、哀れを感じなければ、悪寒を感じるのでしょう。あなたには、これが、ちょっと驚くべきことだということがおわかりにならないでしょう。

何を見ても驚かぬように、そら右だ！
急げ、さらに、そら左だ！
もしお前が、バルザック通り11の2
ヘルデア家の方を避けるつもりでなければ

「その通り」スコーガン氏は言った。「わからないね。」

「不思議だとは、感じないのですか？」

「全然」

「それで、文学的素養をはかれるんですよ」デニスは言った。「魔法に対する感覚とか、言葉には力があるという意識です。文学の技巧や言葉は、魔法の一展開に過ぎません。言葉は、人類の最初でもっとも崇高な発見です。人間は言葉を使って新しい全宇宙を創造しました。人間が言葉を愛し、言葉には力があると考えて何の不思議があるでしょうか！　適切で調和のとれた言葉で、魔術師はからの帽子からウサギを、四大[11]から霊魂を呼び出したのです。その子孫である文学者は今だにその方法を続け、言葉の型をしっかり固定し、完成した言葉の魔力の前では喜びと畏れを抱いてびくびくしています。からの帽子からでたウサギでしょうか？　いいえ、彼らの魔力はもっと巧妙で強力なものです。というのは、彼らは何もない心から感情を呼び起こすからです。たとえどんなに陳腐な表現でも、技巧という技が加われば、非常に興味深いものになります。例えば僕が、『黒い梯子には浮袋がない』と言ったとします。『黒い避難梯子には浮袋がない』と表現すれば、それは自明の真理でわざわざ主張する価値はなくなります。しかし、『黒い梯子には、浮袋がない』と言えば自明の真理にもかかわらず、意味深くて忘れ難く、感動的なものになります。言葉の力を使って無から何かを作り出すこと――これを魔法と言わずして何と言えるでしょう？　また、これが文学でなくて一体何でしょうか？　世の中の偉大な詩の半分は、単に “Les échelles noires manquent de vessie” を “Black ladders lack bladders” と魔法的意味に翻訳したものに過ぎません。あなたには言葉を観賞することはお出来にならないでしょう。残念ですが。」

「心の駆風剤」スコーガン氏は考え込みながら言った。「君に必要なのはこれだ。」

第21章

牧草のはえている中庭から二、三フィート離れた、きのこのような形をした四個の石の上に、小さな倉庫が立っていた。その下はいつも日陰になっていて、じめじめとした長い草がうっそうと茂っていた。白いアヒルの一家族が、午後の太陽を逃れてこの日陰の緑の湿地にいた。羽をくちばしで整えているものもいれば、長い腹を地面に押し付けて、まるで冷たい草が水でもあるかのように休んでいるものもいた。かすかな、仲のよさそうな物音が突然起こったり、尖った尻尾がすばらしいリスト風[12]のトレモロを奏でたりした。突然、彼らの楽しい休息が破られた。大きなドスンという音がして、彼らの頭上の木の床が揺れた。倉庫全体が揺れ、ごみや小さな木屑が落ちてきた。アヒルたちは

ひっきりなしにガーガー大きな声をあげ、この何とも言いようのない恐怖から必死で逃げ出し、ようやく無事農場に着いたのだった。

「怒ってはだめよ」アンが言っていた。「聞いて！　あなたはアヒルを驚かせたのよ。かわいそうに！　間違いないわ。」彼女は、背の低い木製の椅子に横向きに座っていた。右手の肘を椅子の背もたれに置き、もう一方の手であごを支えていた。長身の細みの体は、物憂げで優雅な曲線を描いていた。微笑みながら眼を細めて、ゴンボールドを見ていた。

「畜生！」ゴンボールドが、そう繰り返してもう一度足を踏み鳴らした。画架におかれた、ほぼ出来上がった彼女の肖像画をにらみつけた。

「かわいそうなアヒル！」アンが繰り返し言った。アヒルのガーガーいう声はだんだんかすかになり、やがて聞こえなくなった。

「僕の時間を無駄にしていることがわからないのですか？」彼は尋ねた。「こんな風にあなたにつきまとわれると、気が散って仕事ができませんよ。」

「話をしたり足を踏み鳴らすのをやめて、気分転換のつもりで描けば時間の無駄にはならないわよ。こんな風にしているのも、結局は絵を描いてもらうためじゃありませんか？」

ゴンボールドは呻くような声をだした。「ひどい人だ」はっきりと言った。「どうして僕をここに呼んで滞在するように言ったのですか？　どうして肖像画を描いてくれと言ったんですか？」

「簡単な理由だわ、好きだからよ――少なくともあなたの機嫌がいいときだけど――それに私、あなたが立派な画家だと思ったからよ。」

「簡単な理由」――ゴンボールドは彼女の声を真似した――「僕があなたに恋をするようにしむけ、いざ僕が本気になったら逃げる楽しみを持ちたいからでしょう。」

アンは、頭をのけ反らせて笑った。「あなたに言い寄られて、私がそれを避けるのを楽しんでいると思っていらっしゃるの！　男って、みんなそうね！　男が恋を仕掛けても、女がその気にならないとき、男がどれほど下品で嫌らしくて退屈なものか、あなたに知ってもらいたいものだわ。女の目であなた方自身を見せてあげたいわ！」

ゴンボールドはパレットとブラシを取り上げて、腹立ち紛れの激しさでキャンバスに向かった。「今度はこう言いたいんでしょう、この恋を始めたのは、私ではない、あなたの方だったと。私は無邪気な犠牲者で、ただじっと座っていて、あなたを誘ったりそそのかしたりするようなことはしなかった、と。」

「また、男の理屈ね！」アンが言った。「女が男を誘惑する場合は、いつもそうなるのね。女が誘惑して、そそのかし、誘う、そして男は――立派で罪のない男は――えじきになる。まあ！ゴンボールド、まさか、そんな陳腐な歌を歌うつもりではないでしょう

ね。賢いとは言えないわ、あなたのこと、もう少し思慮深い人だと思っていたわ。」

「それはどうも」ゴンボールドは言った。

「もう少し客観的になってみて」アンは続けた、「あなたは自分の感情をただ出しただけだということが、わからないの？　男たちがいつもやってることだわ。あまりにも野蛮で愚かだわ。男が女に淫らな欲望を抱き、それが強いと、男は女の方が誘惑したとか、わざと挑発したとか言って女のせいにするんだわ。そんなの、野蛮人の考えだわ。苺クリームが食欲をそそる、とおっしゃった方がましだわ。苺クリームと同じように、百人の内九十九人までは、女の方が受身で罪はないわ。」

「では僕が言えることは、これが百人目のケースだということですね。」ゴンボールドは、顔をあげずに言った。

アンは肩をすくめてため息をついた。「あなたって人が、わからなくなってきたわ。よほどの馬鹿か、それとも失礼なのか。」

しばらく黙って描いていたが、やがてゴンボールドは話し始めた。「デニスがいますよ」会話がたった今、途切れたようだった。

「彼とも同じような恋愛ゲームを楽しんでいるんでしょう。どうして、あのかわいそうな奴をそっとしておいてやらないんですか？」

アンは突然、押さえがたい怒りを感じて真っ赤になった。「デニスのことは、全くでたらめよ」怒って言った。「あなたがたった今、上手に説明されたようなゲームを、彼としようなんて考えたこともないわ。」落ち着きを取り戻して、いつもの甘えた声で、人をいらいらさせるような微笑みを浮かべてつけ加えた。「突然、あのかわいそうなデニスの味方になったわね。」

「そうですよ」ゴンボールドは、少しもったいぶったように、まじめな調子で答えた。「僕は見たくないんですよ、若い男が…」

「…破滅の道を転がっていくのをでしょ」アンは、彼のために言葉を続けた。「あなたの気持ちには、感心するわ。私も同感だわ。」

彼女は、ゴンボールドがデニスの話をしたことに、なぜかいらいらしていた。全く嘘だった。あんなふうに非難するのには、少しは根拠があるのかもしれない。しかしデニスに対して――彼女は、決してデニスを弄んだつもりはなかった。かわいそうな男！
彼はとっても優しい。彼女は、少し憂鬱になった。

ゴンボールドは、猛烈な勢いで描いていた。以前は、欲求が満たされないといらいらして心が乱れ仕事が手につかなかったが、今はそのいらいらが猛烈なエネルギーに形をかえたようだった。描き終わると、彼はこの肖像画は悪魔的になると一人つぶやいた。
彼は、アンが最初座ったときの自然なポーズで彼女を描いていた。横向きに座って椅子の背もたれに肘をおいて、頭と肩を体のほかの部分と、ある角度をもたせて前を向くと、

物憂げで自由奔放な感じだった。彼は、アンの体のゆったりした曲線を強調した。キャンバスを横切る線が垂れ下がり、そこに描かれている優雅な姿は、穏やかな退廃に溶け込んでいくようだった。膝の上におかれた手は、しなやかだった。今、彼は顔の部分に取りかかっていた。物憂げな様子と整った目鼻立ちのため、まるで人形のようにキャンバスに浮かび上がってきた。アンの顔だった――しかし内面の考えと感情の光に全く照らされていないときの彼女の顔だった。ときどき彼女の顔に浮かぶ、物憂げで無表情な一面だった。この肖像画はおそろしいくらい似ていた、と同時に、悪意をもって描かれた、偽りのものでもあった。できあがったら悪魔的に見えるだろう、とゴンボールドは思った。彼女はどう思うだろう。

第22章

デニスはのんびりしようと、この日の午後はいつもより早めに寝室にひきあげた。仕事をしたいと思ったが、ちょうど眠たくなる時刻だったし、さっき食べたばかりの昼食は体にも精神にも、もたれていた。真昼の悪魔がとりついていた。昔の修道士たちが『怠惰』と呼び恐れていた、あの退屈でどうしようもない食後の憂鬱にとりつかれていた。アーネスト・ダウソン[13]のような『わずかな倦怠感』を感じていた。美しくて優しい、静かな調子のものを書きたいと思った。物憂げで同時に――何と言ったらいいか？――少し無限的なものにしたかった。アンのこと、報われず成就できない恋のことを考えた。多分、これは理想の恋、絶望型の恋――静かで理論的な恋だろう。満腹の状態だったから、こんな風に思えるのも当然だった。彼は書き始めた。美しい四行詩がペンから流れでてきた。

物思いに沈む恋は
忍び寄る月光の足音
かすかに息づく胸に
血の気なき亡霊を呼びさまし…

このとき外の物音に注意を奪われた。窓から下を見た。アンとゴンボールドが一緒に笑いながら話をしていた。二人は正面の中庭を横切り、右側の塀についている門を通って姿を消した。緑の囲いにある倉庫に通じる道だった。また、彼のためにモデルをするんだろう。心地よく感じていた憂鬱は、激しい感情の突風にあって吹き飛ばされてしまっ

た。腹立たしい思いで詩をごみ箱に捨て、階下に走って降りて行った。「忍び寄る月光の足音」とんでもない！

広間にはスコーガン氏がいた。待ち伏せしていたみたいだった。デニスは逃げようとしたが、だめだった。スコーガン氏の目は老水夫の目[14]のように、光っていた。

「そんなに急ぐこともないでしょう」尖った爪をした小さな蜥蜴のような手を差し出して、彼は言った――「そんなに急がなくても。日光浴でもしようかと、庭に行くところなんですよ。一緒にどうですか。」

デニスは諦めた。スコーガン氏は帽子をかぶり、二人は腕を組んで出て行った。きれいに刈られた芝生の敷きつめられたテラスで、ウィンブッシュ氏とメアリーがまじめな顔でローン・ボーリング[15]をしていた。二人はイチイの木の歩道を降りて行った。デニスは思い出した、ここだった、アンが転んだのは。そして、彼がアンにキスをしたのもここだった――思い出して恥ずかしさのため、顔が赤くなった――ここだった、彼女を背負おうとして失敗したのは。人生って残酷だ！

「正気は！」スコーガン氏は突然長い沈黙を破って言った。「正気――これが私を悩ましているんだ。そして、デニス、君が正気になるか狂気になりきるかの年齢になったとき、悩むのもこれなんだ。正気の世界なら、私は立派な人間だろう。しかし、今のこの奇妙な世界では無きにひとしい。どうみても私は存在していないんだ。私は『音と声以外の何物でもない』んだよ。」

デニスは返事をしなかった。ほかのことを考えていた。「結局」彼は思った――「結局、ゴンボールドの方が、ハンサムで楽しく、自信家なんだ。それにすでに一人前だ。それに比べて僕はまだまだ…」

「この世界で成されたことはすべて、狂人によるものだ」スコーガン氏は続けた。デニスは聞かないようにしていたが、スコーガン氏がしゃべり続けるので聞かないわけにはいかなかった。「私のような人間は、君もいずれはそうなるのだが、今まで何も成し遂げたことはなかった。正気すぎるんだ。理性的なんだ。我々には熱狂的な人間味、強引で熱狂的な力が欠けているんだ。人々は哲学者の話はおもしろがって聞きはする、しかし、それはバイオリニストや大道薬売りに耳を傾けるのと同じだ。理性の人の忠告に従って行動するかというと――決してそうではない。理性の人か狂人か、どちらかを選ばなければならなかったとき、世界は躊躇せず狂人に従った。なぜなら、狂人というのは最も根本的なもの、すなわち情熱とか本能に訴えるからなんだ。哲学者は表面的で余計なもの――理性に訴えるんだ。」

二人は庭の中に入って行った。一本の小道の奥の方に、緑の木製のベンチがあった。香りのよいラベンダーの茂みに囲まれていた。木陰もなく、空気のかわりに熱く乾いた香りを吸うことになるのだが、スコーガン氏が選んだのはここだった。容赦のない太陽

の光を浴びて、彼は元気になったみたいだった。

「例えば、ルター[16]とエラスムスの場合を考えてみたまえ」彼はパイプを取り出し、話ながら詰め始めた。「もし理性の人がいるとすれば、それはエラスムスだ。人々は最初は彼の話に耳を傾けた――優雅で機転のきく、知性という楽器を奏でる新進音楽家だ。称賛し尊敬さえする。しかし彼は自分の思い通りに人々を動かしただろうか――理性的に上品に、あるいは少なくとも普段よりも豚らしくなくだ？　できなかった。次にルターが現れる。激しく情熱的な狂人ルターだ。彼は確信のないことに対して気違いじみた確信を持つんだ。彼が叫ぶと人々は彼の後を追う。もう誰もエラスムスには耳をかさない。彼はその理性ゆえに罵倒された。ルターは真剣だった、現実だった――ちょうど第一次世界大戦と同じように。エラスムスは理性であり上品に過ぎなかった。哲人である彼は人々を動かす力に欠けていた。ヨーロッパはルターについていき、一世紀半にわたる戦争と血なまぐさい迫害に船出した。憂鬱な話だ。」スコーガン氏はマッチに火をつけた。強烈な光で炎はほとんど見えなかった。燃えるパイプの匂いが、ラベンダーの甘いつんとした香りと混じり始めた。

「もし人々を理性的に動かしたいと思ったら、狂的に説得しなければだめだ。宗教の開祖たちの極めてまともな教義でさえ、正気の人間からみると実に嘆かわしく思える熱狂的手段を通じて普及していくんだ。純粋な正気がいかに無力かがわかると屈辱だね。例えば、文明を存続させる唯一の方法は慎み深く知性的に振る舞うことだと、正気は教えてくれる。正気は訴え、議論する。我々の指導者は例の豚らしさに固執し、我々はそれに黙って従う。唯一の望みは狂的な運動だ。そのときが来れば、タンバリンを思いっきり叩く準備はできているが、少し恥ずかしい気もする。しかし…」――スコーガン氏は肩をすくめ、パイプを持ったまま諦めたという仕草をした――「文句を言っても始まらない。孤立無援の正気が役に立たないというのは事実だ。だから、我々が望むものは、狂気の力を健全に理性的に利用するということだ。我々正気な人間にはまだその力があるんだから。」スコーガン氏の目はいつもよりきらきら輝いていた。そしてパイプをはなすと大きく耳障りな、どちらかというと悪魔のような笑い声をあげた。

「しかし僕は力なんかいりません」デニスは言った。彼は強烈な太陽の光から目を遮りながら、疲れて不快な気持ちでベンチの端に座っていた。スコーガン氏はもう一方の端にまっすぐ座ってもう一度笑った。

「誰だって力は欲しいんだ」彼は言った。「何らかの形での力だ。君が望んでいる力は文学的な力だ。人間を迫害する力を望んでいるものもいる。君は言葉を迫害したり歪めたり型に入れたり苦しめたりして、自分に従わせる力を望んでいるんだ。いや、話が逸れてしまった。」

「そうですか？」デニスは力なく尋ねた。

「そうだ」スコーガン氏は構わず続けた、「いずれ、こんな時代が来るだろう。我々理性的な人間が、狂気を使って理性の役に立つという時代がだ。我々はもうこれ以上、世界が偶然の方向に向かうのをそのままにしておくことはできない。教義について気違いじみているルターやナポレオンのような危険な人物が偶然現れて、すべてをひっくり返すのを許すことはできない。過去においてはたいした問題ではなかった。しかし現代の社会は敏感だ。第一次世界大戦のようなものがあと二、三回おきて、ルターのような人物が一人か二人現れたら、世界はめちゃくちゃになってしまうだろう。将来は、理性的な人間が世界中の狂気を適当な水路に導いて役に立つ仕事をさせるようにしなければならない。ちょうど渓流が発動機を動かすようにだ…」

「スイスのホテルに照明をあたえる電気をひくようにですか」デニスは言った。「比喩を最後までおっしゃったらどうですか。」

スコーガン氏は、その言葉を払いのけた。「するべきことが一つだけある」彼は言った。「理性的な人間が力を合わせて、現在我々を動かしている愚かで狂的なものから、力を奪い取らなければならない。合理国家を建設しなければならない。」

暑さのためデニスは心身ともに無気力になっていったが、スコーガン氏の方は反対にだんだん元気になっていくようだった。彼は実に精力的に語り、手を素早く敏速にそして的確に動かし、目は輝いていた。彼の声はデニスの耳には、絶え間のない機械の音のように響いていた。

「合理国家では」スコーガン氏が言っていた、「人間は目の色や頭の形ではなく、精神と気質によって幾つかの種類に分類されるだろう。超人的とも思われる洞察力を持つ訓練を受けた心理学者が、生まれた子供を検査してそれぞれにふさわしい階級にわけるだろう。きちんとラベルを貼られ、その階級にふさわしい教育と仕事を与えられるだろう。」

「どのくらいの階級があるんですか？」デニスは尋ねた。

「かなりたくさんだ」スコーガン氏は答えた。「分類は微妙で複雑になるだろう。しかし細かいところまで話すのは予言者としてはできないし、仕事でもない。とりあえず、合理国家において分類される三つの主な階級について言うのにとどめておこう。」彼は言葉をきり、喉を鳴らし、一、二度咳をした。テーブルの上にコップと水差しがあることをデニスに思い出させるためだった。

「三つの主な階級は」スコーガン氏は続けた「指導者としての知的階級、信仰の人々、一般大衆になるだろう。知的階級というのは思考能力を持ち、その時代の精神的束縛からある程度の自由——しかし非常に知的な人たちでさえ、その自由は極めて制限されているのだが！——に到達する方法を知っている人たちだ。合理国家の指導者には、現実の問題に目を向けた人たちの中から選ばれた知的階級の一団がなる。彼らは、権力の道具として二番目の階級——私が今まで狂人と呼んでいた信仰の人々を使う。彼らは、物

事を熱狂的に情熱的に信じ、信仰と希望のためなら死をも厭わない。こういった熱狂的な人々は、いい意味においても悪い意味においても、恐ろしいくらいの可能性を秘めている、が、偶然の環境に対して勝手に反応することは許されない。いまさら、チェザーレ・ボルジア[17]もルターもマホメット[18]もジョアン・サウスコットもカムストック[19]も現れないだろう。無感覚な環境によって、偶然生まれた頭の古い信仰と欲求の人たちは、人々を涙と後悔に駆り立てるか、互いに首の切り合いをさせるかのどちらかだろうが、彼らも新しく生まれた狂人にとって代わられるだろう。彼らも外見は同じで溢れるばかりの情熱を持っているだろう。しかし過去の狂人とはどれほど違っていることだろう！　というのは、この新しい信仰の人たちはその情熱や欲求を合理的な思想の普及に費やすからだ。全く知らないうちに、より優秀な知性の道具になっていくだろう。」

スコーガン氏は意地悪そうにくすくす笑った。それはまるで理性の名において狂人たちに復讐しているみたいだった。「信仰の人々は、極めて早い時期、すなわち心理学者が検査し、分類表にそれぞれの階級を割り当てるとすぐに、知的階級の監視のもとで特別の教育を与えられる。長時間の暗示によって作り上げられ、世の中にでると溢れんばかりの情熱をもって、指導者の与える合理的な計画を説いたり実行したりする。計画が実行されたり、十年前は有益だった考えが役に立たなくなると、知的階級は新しい狂人に新たな真理を吹き込む。信仰の人々の主な仕事は、知性もたいした情熱もない無数の人間から成り立っている三番目の階級を動かし、指導することだ。大衆に特別な努力が必要になると、すなわちその団結のために人類が情熱的欲求や思想に燃え結ばれる必要のあるときには、信仰の人々は単純で適切な信念を教え込まれて、伝導の使命を帯びて送り出される。精神的運動が相応しくないときには、この信仰の人々は静かにそしてまじめに教育に専念する。大衆の教育にあたっては、人間のもっている際限のない暗示性が科学的に探求されるだろう。大衆は小さいときから組織的に、労働と服従以外に幸福はないと確信させられる。自分たちは幸せで非常に重要で、自分たちのすることは崇高で意味深いと信じさせられる。この下層階級によって地球は宇宙の中心に引き戻され、人類は地球の最も大切な位置に戻される。ああ、合理国家の人たちの運命がうらやましい！一日八時間働き、上のものに従い、自分たちが偉大で重要で不滅だと確信している。彼らは非常に幸せで、今までのどの人たちよりも幸せだろう。彼らは、人生を薔薇色の陶酔状態で送り、目覚めることはない。信仰の人々は、この一生を通じた酒宴で酌人となって、知的階級がその暗い舞台裏で密かに調合する暖かい酒をついでまわり、臣下を酔わせるんだ。」

「合理国家での僕の階級はどうなるんですか？」陽にかざした手の下から眠たそうに尋ねた。

スコーガン氏はしばらく黙って彼を眺めていた。「どこに当てはまるかは難しいなあ」

彼はやっと言った。「肉体労働はできないし、一般大衆としては独立心が強すぎるし、暗示も受けにくい。信仰の人としてはそれに必要な特徴を持っていない。指導力を持つ知的階級というのは、非常に聡明で無慈悲で洞察力がなくてはならない。」彼は言葉をきって頭を振った。「だめだ、わからない。せいぜいガス室かな。」

この言葉にひどく傷ついて、デニスは大声で笑った。「こんなところにいたら、日射病になってしまう」そう言って立ち上がった。

スコーガン氏も後からついて来た。二人は通り道にある青いラベンダーの花すれすれに、狭い道をゆっくりと降りて行った。デニスはラベンダーの小枝を一本折って匂いを嗅いでみた。それからローズマリーの葉も嗅いだ。洞窟の教会堂にある香のような匂いだった。ケシの花の花壇を通った。今ではすっかり花びらが落ちていた。丸くて熟した種の頭は茶色に乾いていた——ポリネシアの戦利品みたいだとデニスは思った。切り取られた頭が棒に突き刺さっている。スコーガン氏に話したいと思った。

「ポリネシアの戦利品みたいですね…」声に出してみると、思ったほどおもしろくも何ともなかった。

沈黙があった。庭の向こうの畑から芝刈機の回る音が聞こえて来た。そして再びかすかになった。

「我々にポリネシアの話をさせるために、たくさんの人々が収穫の畑で働いていると思うと有り難い気がするね。この世の中のよいことと同じように、余暇とか文化にも支払いをしなければならないね。しかし幸いなことに、そうするのは有閑知識階級じゃない。これには感謝しなければ、デニス——本当に、有り難いね」彼は繰り返し言って、パイプの灰をたたいた。

デニスは聞いていなかった。突然アンのことを思い出していた。彼女はゴンボールドと一緒にいるんだ——彼のアトリエで二人きりで。耐えられなかった。

「ゴンボールドのところに行ってみませんか」うっかり言ってしまった。「何をしているのか見るのも楽しいでしょう。」

二人が行ったらゴンボールドがどんなに怒るかと思うと内心おもしろかった。

第23章

ゴンボールドは、二人が現れても、デニスが期待していたほど怒らなかった。実際のところ、茶色で尖っている顔と丸くて青白い二つの顔が、開いたドアのところに現れたときには困惑したというより、どちらかというと嬉しそうだった。絶え間のないいらい

らからくるエネルギーはなくなり、いつもの感情的本領に戻りつつあった。もし少し経っていたら、また癇癪を起こしていただろう——そして、アンは自分の感情を押さえて、そのためますます彼を怒らせていたことだろう。彼は二人に会って本当によかったのだ。

「さあ、どうぞお入りください」彼は愛想よく言った。

デニスは小さな階段を上って敷居を跨ぎ、スコーガン氏が後に続いた。デニスはうさん臭そうにゴンボールドとモデルを眺めたが、二人の表情からは客を歓迎しているといった様子しかわからなった。彼らは本当に喜んでいるのだろうか、それとも上手に嬉しそうなふりをしているのだろうか？彼は疑った。

そのあいだ、スコーガン氏は絵を見ていた。

「すばらしい」彼は満足そうに言った、「結構ですね、性格通りですね。そうだ、そっくりだ。しかし、君がこんな心理的な仕事ができるなんて、驚きですね。」彼は、顔の部分を指さし、キャンバスの上の緩やかな曲線を辿っていった。「バランスのとれたマッス[20]と衝突する平面をもっぱら追及する一派だと思っていたよ。」

ゴンボールドは笑った。「これは、ちょっとした背信行為ですよ」彼は言った。

「それは失礼した」スコーガン氏は言った。「私は絵に関しては全く素人だが、立体主義は特におもしろいと思っているんだよ。自然が全く排除されて、人間精神の産物だけといった絵を見るのが好きだねえ。立派な理論や数学の問題、あるいは工学上の業績から得るのと同じ喜びなんだよ。自然あるいは自然を思い出させるものは、気持ちを乱すんだよ。自然は大きいし複雑すぎる、何よりも要領を得ないし理解できない。私は人間の作品に接すると気が休まる。どんな人が作り考えようとも、その気になれば理解できるんだ。できるだけバスではなく地下鉄に乗るようにしているのもそのためなんだ。というのは、バスに乗っていると、たとえロンドンでも神の創造物——例えば、空やあちこちの樹木、植木鉢の花を見ない訳にはいかないからね。しかし、地下鉄に乗ると人間の作品——幾何学模様に固定された鉄、コンクリートの直線、様々な模様のタイル以外には何も見えない。すべては、人間的であり友好的で理解可能な精神の産物だ。あらゆる哲学や宗教——これらが、宇宙に掘られた精神的地下道でなくてなんだろう！　すべてが人間的だとすぐにわかる、これらの狭いトンネルの中を我々は快適に安全に進み、無限の未探検の訳のわからない土の塊が、周囲や上下に広がっていることを忘れようとしている。そうだ、常に、我々に地下鉄と立体主義を与えよ。きちんとした、適切なそして単純でうまくできている思想を与えよ。そして自然から、また非人間的に巨大で複雑で曖昧なものから救いたまえ。私には、あの迷路を歩き回る勇気が、とりわけ時間がない。」

スコーガン氏が話しているあいだ、デニスはこの四角い小さな部屋の向こう側にいる、まだ物憂げに優雅に背の低い椅子に座っているアンのところに歩いて行った。

「どう？」彼は、じっと見つめて尋ねた。何を尋ねたんだろう？　自分でもわからなかった。

アンは彼を見上げ、その返事として笑うような調子で、彼の言った「どう？」という言葉を繰り返した。

デニスは、もう何も言えなかった。アンが座っている椅子の後ろには、二、三枚のキャンバスが壁に向けて裏返しにして立て掛けてあった。彼はそれを取り出して眺め始めた。

「私も見ていいかしら？」アンが尋ねた。

彼は、それらを壁に一列に並べた。アンがそれを見るためには、ぐるりと振り向かなければならなかった。馬から落ちる男を描いた大きな絵や、花の絵や小さな風景画があった。デニスは、両手を椅子の背もたれにおいて彼女の方にかがみこんだ。部屋の向こう側の画架の後ろで、スコーガン氏はしゃべり続けていた。しばらくのあいだ二人は黙って絵を見ていた、いや、どちらかといえばアンの方は絵を見ていたが、デニスはほとんどアンを見ていた。

「私は男と馬の絵が好きだわ、あなたは？」やっと、尋ねるような微笑みを浮かべて見上げて言った。

デニスは頷いた、それから奇妙な絞り出すような声で「あなたが好きです」と言った。こう言うのに非常な努力がいるみたいだった。

これは、アンが今まで何度も耳にし、冷静に聞いていた言葉だった。しかし今日は――多分、突然だったからか、またそのほかの理由からか――この言葉は思いもかけない動揺を彼女に与えてしまった。

「まあ、かわいそうなデニス」彼女は笑いながら、やっとこれだけ言った。しかし、言いながら赤くなっていた。

第24章

正午だった。デニスは自分の部屋でただ漠然と仕事をしていたが、たいした成果が得られず階下に降りて行った。そこには誰もいなかった。庭に出ようと思ったとき、ふと見慣れた、しかしどこか神秘的なものが目に留まった――ジェニーが、よく密かにせっせと筆を走らせていた例の大きな赤いノートだった。窓下の腰掛けに置き忘れたのだ。誘惑が強かった。きちんと留めてあるゴム輪をはずした。

「極秘　開けるべからず」と、大文字で表紙に書いてあった。彼はびっくりして眉をあ

けた。パブリック・スクール時代にラテン語の文法書によく書いたようなものだった。

ワタリガラスは黒い、ミヤマガラスも黒い、
しかしこの本を盗む泥棒はもっと許しがたい！

妙に子供ぽいと思い、にやりとした。開けてみた。中を見たとき、まるで打ちのめされたように、ぎょっとした。

デニスは自分自身の最大の批評家は自分だと思っていた。鼓動する魂の中まで調べる容赦のない批評家だと、考えるのが好きだった。自分の弱点、愚かさ――これは、自分自身が誰よりもよく知っている。実際そんなものは、自分以外には誰も知らないだろうと漠然と考えていた。他人のことは見えても、自分のことが人にわかるなどとは想像もできなかった。また、他人が、自分がいつもするのと同じように自由気儘に悪意のある調子で、自分のことを批評するなどとは思いもしなかった。自分の目には欠点は見える、しかし、それを見るのは自分だけの特権だった。世の中の人々から見ると、彼は間違いなく一点の曇りもない水晶なのだ。ほとんど、自明の理だった。

赤いノートを開けた途端、その水晶は地面にガラガラと音を立てて砕け散り、取り返しのつかないくらい粉々になった。結局、最も手厳しい批評家は自分自身ではなかった。この発見は惨めだった。

ジェニーが密かに描いていた成果が、彼の目の前にあった。彼が読書している戯画(本は逆さま)だった。背景には、ゴンボールドとアンらしき二人がダンスをしている。「壁の花と負け惜しみの寓話」という題がついていた。恐ろしい反面、興味をそそられ、デニスは絵をじっと見ていた。見事な絵だった。表情は無関心を装い、嫉妬心を押さえて超然としたふたりをしているし、体と手足の様子は学者っぽい威厳を保っているが、落ち着かない足の様子がすべてを裏切っている――ひどいものだった。さらに非情なことは、彼にそっくりで、あまりにも正確で、肉体的特徴がきちんと描いてあり、巧みに誇張されていることだった。

デニスはパラパラとページをめくった。ほかの人たちの戯画もあった。プリシラとバーベキュー・スミス氏、ヘンリー・ウィンブッシュ、アンとゴンボールド、スコーガン氏。スコーガン氏については、ジェニーは不気味というより悪魔的に描いていた。メアリーとアイヴァーの絵もあった。これらは、ほんのちらりとしか見なかった。自分についての最悪の姿を見たいという恐ろしい欲求が、彼を捉えた。自分以外の絵には、目もくれずページをめくった。七ページ分が、彼の絵に当てられていた。

「極秘　開けるべからず」彼は禁を破った。そして当然の報いを受けた。物思いに沈んでノートを閉じゴム輪をもう一度かけた。沈んだ気持ちで、テラスに出た。そうだ、こ

れだったんだ。こんな風にしてジェニーは、暇なとき孤独な象牙の塔で過ごしていたんだと、思った。それなのに彼は、ジェニーのことを単純で批評力などないと思っていたのだ！　愚かなのは、彼の方だった。ジェニーに対して、怒りは感じなかった。いや、問題なのは、ジェニーという一人の女性ではなく、彼女とあの赤いノートの現象が表しているもの、つまりそれが意味し具体的に象徴しているものだった。そこには、彼以外の人間の広大な意識の世界が表われていた。彼のような学究的な孤独の中にいるものには、信じ難い何かが象徴されている。ピカデリー・サーカス[21]に立って、群衆が歩き回っているのを見ても、その数千という人間の中にいて、自分だけは完全に意識的で知的な人間だと考えていた。世の中の人々が、自分と同じように複雑で完璧だとは思えなかった。そんなことは、あり得ないと思っていた。しかし、ときどき自分以外の世界とそこに存在する意識と知性の恐ろしい現実を発見し、辛い思いをするのだった。この赤いノートは、そんな発見の一つだった。砂の上の足跡だった。自分以外の世界が存在しているという事実は疑いようがなかった。

テラスのてすりに腰をおろして、しばらくこの不愉快な現実をじっと考えた。さらに考え込みながら、プールの方に降りて行った。孔雀の雄と雌が、みすぼらしい羽を下の芝生の上に引きずっていた。いまいましい鳥たちめ！　首の付け根のところは太く貪欲そうに肉付きがよく、惨めなくらいからっぽの頭まで伸びていて、目は平らで、くちばしは尖っている。寓話作家が人間の道徳についての話に動物を使うのはもっともだ、と思った。戯画が真実を伝えているのと同じように、動物は人間に似ている。(ああ、あの赤いノート！) ゆっくり歩いている鳥に向かって棒切れを投げた。鳥は食物かと思って、それに向かって勢いよく走って行った。

彼は歩き続けた。巨大なトキワガシの木の深い陰が、彼を包みこんだ。大きな木でできた蛸のように、その長い枝を四方に広げていた。

枝を張ったトキワガシの木の下に…

誰の詩か思いだそうとしたが、だめだった。

筋骨逞しい鍛冶屋
ゴムひものような腕をした

こんな腕になるためには、ミュラー式の運動をきちんとやらなければだめだ。

彼はもう一度太陽の中に出た。目の前にプールがあり、青銅色の水面には夏の日の青空と様々な緑色のものが映っていた。それを見ながら、彼はアンの剝き出しの腕や、な

めし皮のようにつやつやした水着のことや、よく動く膝や足のことを思い出した。

白い足の小柄なルース
そして逞しいバーバリー猿のような…

ああ、また他人の作ったお古だ！　こんな頭を自分のものと呼べるだろうか？　本当に、自分自身の頭といえるものがあるのだろうか、それとも単なる教育のお陰に過ぎないのか？

彼は、水際の回りをゆっくりと歩いた。イチイの木に囲まれて湾状に引っ込んだところにメディチ[22]家のビーナス像の模造品が置いてあった。十七世紀の無名の石工が、気まぐれにおどけて造ったものだった。その台座のところに、メアリーが考え事をしている様子で座っているのが見えた。

「やあ！」彼は声をかけた。すぐ近くを歩いていたので、何とか言わない訳にはいかなかった。

メアリーは顔をあげた。「あら！」彼女は憂鬱な興味のなさそうな声で答えた。

このあずまやは黒っぽい木々を切り開いて作られたもので、デニスにはこの雰囲気は心地よく哀愁を感じさせるように思われた。ビーナス像の近くに腰を降ろした。長い沈黙があった。

その日の朝食のとき、メアリーの皿の上にゴブリイ公園の絵葉書がおいてあった。広い正面には十六もの窓があり堂々としたジョージ王朝ふうの建物で、前景には庭園があった。広大な滑らかな芝生が絵の左右に伸び、だんだん遠のいていた。あと十年もこの不景気が続けば、ゴブリイはそこにいる貴族と共に見捨てられ朽ち果てるだろう。五十年もたてば、この地方の人たちはこの建物のことなど覚えていないだろう。これより前になくなった修道院同様、すっかり消滅するだろう。しかし、今のメアリーにはこんなことはどうでもよかった。

絵葉書の裏の宛て名の隣に、アイヴァーのはっきりした大きな字で四行詩が書かれていた。

やあ、月光の乙女よ！　太陽の花嫁、さようなら！
飛び立つ天使から抜け落ちた光輝く羽根のように、
我が心の神秘の部屋に
朝の記憶、夜の思い出が眠る。

このあと、追伸が三行続いていた。「洗面台のひきだしに安全カミソリを忘れました。メ

イドに送らせてくれませんか。よろしく――アイヴァー。」

太古から変わらぬビーナス像の下に座って、メアリーは人生と愛について考えていた。抑圧されていたものが解放されても、期待されていた心の平静など全くなく、今まで経験したこともない不安と惨めな思いが訪れたに過ぎなかった。アイヴァー、アイヴァー…今では、彼なしでは生きていけなかった。一方、彼の方は絵葉書の裏の詩からもわかるように、彼女なしでも十分生きていけるのは明らかだった。彼は、今ゴブリイにいる。そしてそばには、ゼノビアがいる。メアリーはゼノビアのことは知っていた。彼女はあの夜、庭で彼が歌った歌の最後の歌詞を思い出した。

翌日、フェリスは上の空
羊も猟犬も与えた。
男がリジェットになら、ただで与えるような
一回のキスの代金に対して。

メアリーは、これを思い出して涙を流した。今まで、こんなに悲しかったことはなかった。

最初に沈黙を破ったのはデニスの方だった。「個人は」デニスは穏やかで物悲しそうな調子で話し始めた。「独立した宇宙ではありません。ほかの個人と出会って、自分以外の世界が存在するということを認めなければならないときがあります。」

彼は個人的な打ち明け話の前置きとして、非常に抽象的な一般論をなんとか作り出した。話をジェニーの戯画にもっていくための、きっかけだった。

「その通りだわ」メアリーが言った。それから、自分のために一般論を作りながら付け加えた。「一人の個人がほかの個人と極めて親密な関係をもった場合、女は――いえ、男の場合もあるけど――必ずといっていいくらい打撃を受けるか、与えるかだわ。」

「人間は」デニスは続けた、「自分の姿にまどわされて、自分に見えるのと同じように実は他人にもそれが見えているということを忘れてしまうのです。」

メアリーは聞いてなどいなかった。「苦しみは」彼女は言った、「性の問題においては、強烈だわ。もし女性が男性にごく自然に親密な関係を求めれば、彼女は間違いなく打撃を受けるか与えるかだわ。一方、女性がもし関係を避ければ不自然な抑圧の結果、同じように大きな苦しみを受ける危険があるのよ。ジレンマだわ。」

「僕の場合を考えると」デニスは思った方向に断固進みながら言った。「ほかの人たちの一般的な物の考え方、とりわけ僕についての彼らの評価について、僕がいかに知らなかったか驚いているんです。僕たちの心は、外部の世界に対してときどきしか公開されない封印された書物みたいなものです。」彼は、ゴム輪をはずすようなジェスチャーをし

てみせた。

「恐ろしい問題だわ」メアリーは考え込みながら言った。「どんなに恐ろしいかは、個人的に経験してみなければわからないのよ。」

「その通り」デニスは頷いた。「直接経験してみなければ、だめです。」彼女の方に体を近づけて、少し声を低くした。「例えば、今朝…」彼は話し始めた。しかし、彼の内緒話は遮られてしまった。屋敷の方から低いどらの音が聞こえて来た。遠くからだったので心地よい響きだった。昼食の時間だった。メアリーは機械的に立ち上がった。デニスは、食物にこれほどの食欲を示す彼女が、彼の精神的経験にはほとんど関心を示さないのにいささか気分を害したが、彼女の後について行った。二人は、一言も口をきかずに屋敷の方へと歩いて行った。

第25章

「みなさんに、承知していただきたいのですが」ヘンリー・ウィンブッシュ氏は夕食のときに言った。「今度の月曜日は、銀行休日[23]なのでバザーの手伝いをお願いしたいのです」

「あら！」アンが叫んだ。「バザー――すっかり忘れていたわ。嫌だわ！　やめることはできないの、ヘンリー伯父さま？」

ウィンブッシュ氏は、ため息をつき首を横に振った。「残念だが」彼は言った、「できないな。前からやめたいとは思っていたんだが、慈善事業に対する主張は強いから。」

「私たちの欲しいのは、慈善じゃないわ」アンは反抗的につぶやいた。「ちゃんとした理由だわ。」

「それに」ウィンブッシュ氏は続けた。「バザーは、もう年中行事みたいになっているんだよ。ええと、始めてから二十二年になる。最初のうちは地味なものだったんだが、今では…」彼は手をさっと振り、黙った。

ウィンブッシュ氏が今だにバザーを我慢して続けているのは、彼の公共心をおおいに表していた。最初は神の栄光を称えた教会のバザーとして始まったが、だんだん派手なものになり、クロームの毎年のバザーには、メリーゴーランドやココナッツの実落とし[24]の店、そのほか様々な余興が登場するようになった――大規模な本物の博覧会だった。この地方のバルトロマイ祭[25]市で、近くの村人だけでなく州の人たちまでもが、銀行休日のこの娯楽を求めて屋敷に集まるのだった。お陰で村の慈善施設はかなりの利益をうみ、この事実だけのために、ウィンブッシュ氏はこの毎年私園や庭園を汚す迷惑な出来事をやめなかった。もっとも彼個人にとってはこのバザーは、周期的に起こる決して減るこ

とのない苦痛の種ではあったが。

「もう、準備は全部できているんだよ」ヘンリー・ウィンブッシュは続けた。「大きい方のテントは明日張ればいいし、ブランコとメリーゴーランドは日曜日にくる。」

「それじゃもう逃げられないわね」アンがみんなの方をぐるりと見回して言った。

「みんな、それぞれ何かしなくてはいけないわよ。受け持ちに関しては、特別の思し召しで自分で選んでいいわよ。私はいつものようにお茶の係、プリシラ伯母さまは…」

「あら」ウィンブッシュ夫人は彼女を遮って言った、「私には、バザーより大切なことがあるのよ。でも月曜日には、村の人たちにくつろいでもらえるように一生懸命しますから、心配はいらないわよ。

「ああ、よかった」アンが言った。「村の人たちのおもてなしは、プラシラ伯母さま。じゃあ、あなたは何をするの、メアリー?」

「私は、人が食べてるそばで立って見ているのは嫌だわ。」

「じゃあ、子供の遊びを見てちょうだい。」

「いいわよ」メアリーは承知した、「子供たちの面倒をみるわ。」

「スコーガンさんは?」

スコーガン氏はしばらく考え、とうとう「占いをしてもいいかな?」と尋ねた。「占いは得意なんだが。」

「でも、その格好じゃ占いは無理だわ!」

「そうかな?」スコーガン氏は、自分の洋服を眺めた。

「扮装しなければだめよ。それでもよろしい?」

「どんな恥ずかしいことでも我慢しますよ。」

「いいわ!」アンは言い、それからゴンボールドの方を向いて、「あなたは、即席で絵を描いてくださらない?『似顔絵はいかが、五分でできますよ。たったの一シリング』てね。」

「僕がアイヴァーでなくて、残念だね」ゴンボールドは笑いながら言った。彼だったら、もう六ペンス出せばオーラをおまけに描きますよって、言えるんだが」

メアリーは顔を赤らめた。「何にもなりませんわよ」彼女はきつい口調で言った、「真剣な問題を冗談半分に言っても、それに、結局あなたの個人的な考えがどうであれ、心霊研究は本当にまじめな問題ですもの。」

「じゃあ、デニスは何をするの?」

デニスは恨めしそうな身振りをした。「僕は何もできないんですよ」彼は言った。「上着のボタンホールに何かつけて案内役になって、みんなにお茶を飲む場所を教えたり芝生の上を歩いてはいけないと注意しますよ。」

「だめ、だめ」アンが言った。「そんなのだめよ。もう少しちゃんとしたことしなくて

は。」

「でも、何をすればいいんですか？　いいものは全部とられてしまったし、下手な詩でも読む以外できませんよ。」

「それじゃあ、詩をお読みなさい」アンが決めた。「バザーのための詩を作ってちょうだい――『銀行休日によせる歌』っていうのはどうかしら。ヘンリー伯父さまの印刷機で刷って、一部二ペンスで売りましょう。」

「六ペンスですよ」デニスは反対した、「六ペンスの価値はありますよ。」

アンは首を振った。「二ペンスよ」彼女は、はっきりともう一度言った。「誰も二ペンス以上ださないわよ。」

「さあ、次はジェニーだ」ウィンブッシュ氏が言った。「ジェニー」彼は大きな声で尋ねた、「何をするかい？」

デニスは、一枚六ペンスで戯画を描いたらと言おうと思ったが、彼女の才能については知らないふりをしておくほうが賢明だと思い直した。例の赤いノートのことを思い出した。本当に、僕はあんな風に見えるんだろうか？

「何をするかですって」ジェニーは繰り返した、「何をするかですって？」しばらく、眉をひそめて考えていた。それから、顔がぱっと輝きにっこり笑った。「小さいとき」彼女は言った、「太鼓を習ったの。」

「太鼓？」

ジェニーは頷き、それを証明しようとナイフとフォークを太鼓の撥のようにして皿を叩いた。「もし、太鼓を叩くチャンスがあれば」彼女は言い始めた。

「もちろん」アンは言った、「チャンスならいくらでもあるわ。あなたには太鼓をお願いするわ。では、役割は以上。」彼女は付け加えた。

「いい分け方だなあ」ゴンボールドが言った。「銀行休日が楽しみだなあ。楽しくしなければ。」

「そうあってもらいたいですね」スコーガン氏が相槌をうった。「でも、楽しくなくても、安心ですよ。休日というものは、たいてい期待はずれなものですよ。」

「おや、おや」ゴンボールドが反対した。「クロームでの僕の休日は期待はずれではありませんよ。」

「そう？」アンは何食わぬ顔を彼に向けた。

「ええ、すばらしいですよ」彼は答えた。

「それはよかった。」

「物事の本質から考えると」スコーガン氏は続けた、「我々の休日は、期待はずれにならざるをえないんだよ。ちょっと考えてごらんなさい。休日とは何か？　理想的プラトン的休日[26]中の休日というのは、完全で絶対的な変化なんだ。この定義には、みんな賛成

だろうね？」スコーガン氏は、テーブルのみんなの顔をぐるりと見回した。彼の尖った鼻は、急速に動いて、羅針盤の方位を一回りした。反対の意見はなかった。彼は続けた、「完全で絶対的な変化、その通り。しかし、この完全で絶対的な変化こそが、我々が決してもてないものではないかね？——決して、物事の本質から考えると。」スコーガン氏は、もう一度みんなを見回した。「もちろん、その通りだ。ホモ・サピエンス、社会の一員である我々に、どうして完全な変化など望めるだろうか？　我々には能力の限界があり、社会は我々の致命的とも言える暗示にかかりやすい性質を利用して、色々な概念を押し付ける、そして我々には独自の個性というものもある、我々はこういったものに縛られているんだ。我々にとって完全が休日など問題外だ。完全な休日を求めて勇ましい戦いをする人もいるが、決して成功などしない。比喩を使った表現をしてもよければ、サウスエンド[27]より向こうに行くのは無理だね。」

「憂鬱になるわね」アンが言った。

「そのつもりですよ」スコーガン氏は右手の指を広げながら続けた。「例えば、私を見てごらんなさい。どんな休日がもてると思うかね？　自然は私に情熱と能力を授けるときひどくけちだったんだ。人間の可能性の範囲は、どんな場合でも情けないほど限りがある。私の範囲はそのなかでも狭いほうだ。人間という楽器を構成している十オクターブのうちで、多分私は二オクターブぐらいだろう。私はある程度の知性はあるが、美的センスはない。数学的能力はあっても宗教心はない。狩猟は好きだが、野心はないし金に対する欲もない。その上、教育が私の範囲も狭くしてしまった。社会で育ったので、その法律が染み込んでいる。休日をとるのが恐ろしいだけでなく、そうしようとすること自体が苦痛なんだ。要するに、刑務所が怖いだけでなく、私には良心というものがあるんだ。そうだ、経験でわかるんだ。このうんざりするような自分自身から、あるいはこの我慢できない知的環境から逃れて、休日をとろうと何度試みただろうか！」スコーガン氏はため息をついた。「しかし、いつもうまくいかなかった」彼は付け加えた、「いつも、だめだった。若いときは必死で努力したんだ——どれほど一生懸命だったか！——信心深く、美的であろうと。この二つの感情は、非常に大切ですばらしいものだ、これらを感じることができたら人生はもっと豊かで暖かく、そして輝かしい楽しいものになるだろうと、自分に言い聞かせた。感じようと努力した。神秘主義の本も読んだ。しかしそれらは、私にはもっとも嘆かわしい、はったりとしか思えなかった——著者が執筆中に感じるのと同じようには感じられない人たちにとっては、いつもそのように思われるのだが。大切なのはその感情だからだ。本というものは、本来表現できない感情を知的に論理的に表現しようとする試みに過ぎない。神秘主義者は、みぞおちに感じる豊かな感情を客観化して、一つの宇宙論を作り上げる。ほかの神秘主義者にとっては、この宇宙論は豊かな感情の象徴なんだ。無宗教の人間にとっては、無意味な象徴で奇妙以

外の何物でもない。憂鬱な事実だ！　いや、話が逸れた。」スコーガン氏は、言葉をきった。「宗教心については、このくらいにしよう。美的感覚については――この感情を養うために大変な努力をした。ヨーロッパのあちこちで、本物の芸術作品をたくさん見てきた。タデオ・ダ・ボッギボンシや、あの奇妙なアミコ・ディ・タデオについてはヘンリーよりよく知っていたときがあったと、思うね。今では、さいわいにも当時あれだけ努力して得た知識の大部分は忘れてしまった。しかし、その知識は膨大なものだったと自惚れでなく断言することができるね。もちろん、黒人の彫刻や十七世紀後半のイタリア芸術について知っているふりをするつもりはない。しかし、1900年以前に流行したあらゆる時期の芸術については何でも知っている、いや知っていた。そうだ、もう一度言おう、知り尽くしていたんだ。しかし、だからといって芸術一般についての鑑賞力を養ってくれただろうか？　だめだった。一枚の絵、その絵の歴史については既に知られているものも推測のものも――いつ描かれたか、作者の性格はどんなものだったか、絵を描くにいたった影響など――知っているのだが、その前に立っても本当の美的感情だといわれているような、あの不思議な興奮と精神の高揚を感じることはなかった。絵の主題に対する関心しかなかった。いや、その主題が陳腐だったり宗教的だとうんざりするだけだった。にもかかわらず、私は十年間ものあいだ色々な絵を見続け、ようやく、絵は私をうんざりさせるだけと正直に認める気になった。それ以来、私は休日をとろうとするあらゆる企てを捨てたんだ。ちょうど、銀行員が十時から六時まで毎日の仕事をするのと同じ諦めの気持ちで、この陳腐な毎日の自己の発展に努めているんだ。ほんとうに、休日なんか！　ゴンボールド君、もし君がまだ休日をとることを期待しているのなら、そりゃお気の毒だね。」

ゴンボールドは、肩をすくめた。「多分」彼は言った、「僕の標準は、あなたのほど高くないんでしょう。しかし個人的には、このあいだの戦争は僕の望み通り日常の礼節や健全さ、普通の感情や偏見からの完璧な休日だったと思いますよ。」

「そうだね」スコーガン氏は考え込みながら言った。「なるほど、あの戦争は確かに休日らしかった。サウスエンドより少し遠くだし、ウェストン・スーパ・メア[28]くらいかな。ほとんどイルフラクーム[29]かな。」

第26章

天幕と模擬店の小さなテント村が、緑の広大な敷地の中、庭園の境界線をちょうど越えたところに出来ていた。たくさんの人びとが通りに集まり、男性はたいてい黒い服―

―冠婚葬祭用のもの――女性は薄地のモスリンの服を着ていた。あちこちに、三色の旗が力なく垂れていた。テント村の真ん中には、赤や金の水晶色のメリーゴーランドが、太陽の光の中できらきら輝いていた。風船売りの男が人びとのあいだを歩き回り、頭上には、巨大な蒭葡の房を逆さまにしたような色とりどりの風船がピンと浮かんでいた。船の形をしたブランコは草刈鎌のような動きで風をきり、メリーゴーランドを動かすエンジンの煙突からは、ほっそりとした、ほんのわずかな黒い煙の柱がゆらいでいた。

デニスはファーディナンド卿の塔の一つの天辺に上がり、太陽で灼けた鉛板の上に立って、両肘を欄干について下の様子を眺めた。蒸気オルガンがびっくりするような音を出していた。自動シンバルは容赦のない正確さで、耳をつんざくような旋律のリズムを打ち鳴らした。楽団は、ガラスと真鍮が砕け散る音のようだった。低音部のずっと低いほうでは、最後の審判のらっぱ[30]が大きな音をたてていた。非常に執拗で、またよく響くので、交互にでる主音と属音が音楽全体からはずれて、二つだけで大きく単調なシーソーのような音楽を作っていた。

デニスは、その渦巻く騒音の淵をのぞき込んだ。もし彼が欄干から飛び降りたら、その騒々しい音は間違いなく彼を受け止めて、噴水が砕ける波がしらでボールを操るように、彼を宙に浮かせて上下に踊らせるだろう。別の考えが浮かんだ、今度は詩の形だった。

我が魂は、沸き立つ大釜の上に張られた
一枚の薄い真っ白な羊皮紙

だめだ、だめだ。しかし、何か薄くて広がったものが下から吹き上げられるという発想は気に入った。

我が魂は、腸線の薄い天幕…

いや、それよりもこの方がいいかもしれない――

我が魂は、蒼白き薄い膜…

これはいい、蒼白き薄い膜か。きちんとした解剖学的性格を持っている。ピンと張られて、騒々しい人生の風に打ち震えている。澄みきった天上の言葉の世界から、現実の渦の中に降りて行く時間だった。彼はゆっくりと降りて行った。「我が魂は、蒼白き薄い膜…」

テラスには、名士たちが立っていた。フランスの漫画新聞にでてくるような、イギリス貴族の戯画みたいな老マリン卿がいた。背の高い男で、鼻も長く、長く垂れた口ひげをはやし、古い象牙のような長い歯をしていた。さらに滑稽なくらい下の方には短いカバートコート[31]、もっと下にはこれまた長い、長い脚がパールグレイ色のズボンに納まっている――膝あたりが危なっかしげに曲がっていて、歩くと横にひょろつく感じだった。彼の横には、背が低くずんぐりしたキャラミー氏が立っていた。ローマ人の胸像みたいな顔と短い白髪の保守党の老政治家だ。若い女の子たちは彼と二人きりでドライブするのを嫌がった。ほかの名士たちが、英国にはもう住めないと色々理由をつけてカプリ島[32]で金に埋もれた亡命生活を送っている中で、何故老マリン卿がそうしないのか不思議に思われていた。彼らは、笑いながらアンと話をしていた。一人は心から笑い、もう一人はフクロウのような笑い声をあげていた。

黒と白の縞模様の落下傘を引いて、黒い絹の風船のように見えるのは、谷の向こう側の大きな屋敷に住んでいるバッジ夫人だった。地面に立つとずんぐりと見え、黒と白の日傘の骨が、彼女の上に覆いかぶさるように立っているプリシラ・ウィンブッシュの眼を突きそうだった。プリシラは紫色の洋服を着て、黒い羽根が上下に揺れると、一流のパリの華やかな葬式を思わせる女王様のようなトーク帽[33]をかぶっている。

デニスは居間の窓からそっと彼らを覗いていた。彼の目は突然、無邪気で子供らしい偏見のないものになった。彼らは、とてつもなく現実離れして見えた。だが、実際に存在し機能し意識があり、知性があるのだ。そのうえ、彼だってみんなと同じだった。そんなことが信じられるだろうか？　しかし例の赤いノートの証拠は決定的だった。

向こうに行って「ごきげんよう」と言った方が礼儀だろう。しかし今のデニスは話をしたくなかったし、できもしなかった。彼の魂は、薄くて打ち震える蒼白い膜なのだから。彼は魂の感受性をできるだけ傷つけず、清らかなままにしておきたかった。そっと横の出口から出て、庭園の方に降りて行った。賑やかなバザーに近づくと、彼の魂はわなわなと震えた。一瞬立ち止まったが、足を踏み入れ呑まれてしまった。

何百万という人がそれぞれ独自の顔を持ち、すべて存在し別々に生きている。こう考えると不安だった。彼は二ペンスで『入れ墨女』を見、さらに二ペンス払って『世界一の大ネズミ』を見た。『ネズミ』小屋を出たとき、水素ガスの入った風船の糸が切れて大空に舞い上がった。子供が大声を上げてその後を追ったが、真っ赤なオパールのように完全な球体の風船は、上へ上へと静かに上がっていった。デニスは、目で追っていったが、やがてまばゆいばかりの光の中に消えていった。魂に追いかけさせることができたら！…

彼は案内役の薔薇の飾りをボタンホールにさして、あてもなく、しかし役員らしく人込みの中に入って行った。

第27章

スコーガン氏は小さなテント小屋の中に色々な設備を与えられていた。黒いスカートと赤い胴着を着て、黒いかつらのまわりには黄色と赤の大きなバンダナを巻いた姿は――尖った鼻と日焼けして皺のある顔のため――フリス[34]描くところのダービー日のジプシーの老婆のようだった。入口のカーテンにピンで留められた看板が、テントの中には「エクバタナ[35]の魔法使い、セソストリス[36]」が、居ることを告げていた。テーブルの前に座り、スコーガン氏は神秘的な沈黙の中で客を迎え入れ、手の動きだけで、自分の前に座り手を広げるよう指示した。それから差し出された手を拡大鏡と角縁の眼鏡を使って調べた。手相を見ながら恐ろしそうに首を振ったり、眉をひそめたり舌打ちをしたりした。ときどき、まるで独り言のように「恐ろしい、恐ろしい！」とか、「神様お助けください！」とつぶやいて十字を切るのだった。笑いながら入って来た客もまじめな顔になって、この魔法使いの言葉を本気にする。顔付きはどこか威嚇的である。結局そんなことあり得るのだろうか？　老婆が手相を見ながら首を横に振るとき、客はこう考える、ほんとうに…そして、胸をどきどきさせながら神のお告げを待つ。しばらくのあいだ、黙って手相を見た後突然スコーガン氏は顔をあげ、しわがれた囁き声で、ぞっとするような質問をする、「赤毛の若い男に頭をハンマーで殴られたことはありませんか？」答えはたいてい否定的なものであるが、そんなときには、スコーガン氏は何度か前を振って、「そうでしょう。すべてはこれから起きるのです、これからです、もっともそれほど先のことではありません」と言うのだった。またときにはじっと眺めたあげく、「知らぬが仏、知れば地獄というものです」と囁き、考えると必ず絶望するような未来について明かすのを拒むのだった。セソストリスは恐怖で大成功だった。人びとは自分たちに下される宣告を聞く特権を得ようと、魔法使いの小屋の前に列を作って並んだ。

デニスはあちこち回っている途中、このお告げの神殿の前に並んでいる祈願者たちを興味深そうに見た。スコーガン氏がどのようにその役を演じているか見たいと思った。そのテント小屋は作りが悪くぐらぐらしていた。壁と弛んだ屋根のあいだには、長い大きな割れ目や隙間があった。デニスはお茶のテントに行って、木製のベンチと小さな英国旗を借りた。これを持って、急いでセソストリスの小屋へ戻った。小屋の裏にベンチをおいてその上にあがり、忙しそうに小屋の柱の天辺に英国旗を結び始めた。テントの割れ目から中がほとんど見えた。スコーガン氏のバンダナを巻いた頭が真下にあった。彼の恐ろしい囁き声がはっきりと聞こえた。デニスは魔法使いが、経済的損失や脳溢血による死、そして次の戦争の空襲では破戒があるなどと予言するのを聞いていた。

「また戦争があるんですか？」この最期を予言された老婦人が尋ねた。

「まもなくです」スコーガン氏は静かに自信をもって答えた。

この老婦人の次は、ピンクのリボンの飾りのついた白いモスリンの服を着た少女だった。彼女は幅広の帽子をかぶっていたので、デニスには顔は見えなかったが、その姿やまるまるとした剝き出しの腕から、若くてきれいだと判断できた。スコーガン氏は、彼女の手を見て囁いた、「まだ、処女だね。」

若い女はくすくす笑って叫んだ、「あら、まあ！」

「しかし、そう長くは続かない」スコーガン氏は低くこもった声で付け加えた。若い女性はもう一度くすくすと笑った。「運命というものは、大きな事柄と同じように小さい出来事にも関心があるんだよ、あなたの手にそう現れている。」スコーガン氏は、拡大鏡を取り上げて、もう一度白い手を調べ始めた。「とても、おもしろい」。まるで独り言のように言った――「とても、おもしろい、極めて明白だね。」彼は口をつぐんだ。

「何が明白なんですか？」彼女が尋ねた。

「言ってもいいかどうか」スコーガン氏は首を振った。耳につけていた、ぶらぶらしている真鍮のイヤリングがチリンチリンと鳴った。

「お願いです、教えてください！」彼女は懇願した。

魔法使いは彼女の言葉を無視しようとした。「その後のことについてははっきりしていない。結婚生活に落ち着いて四人の子供をもうけるか、映画にでて子供は産まないか、運命は何も語っていないんだよ。ある一つの決定的な事件についてだけ、はっきりしているんだ。」

「何ですか？　何ですか？　話してください！」

白いモスリンの姿は体を前に乗り出した。

スコーガン氏はため息をついた。「わかった」彼は言った、「どうしても知りたいとおっしゃるのなら。何か都合の悪いことが起きてもご自分の好奇心を責めるべきですよ。では、お聞きなさい。」彼は鋭い鉤爪をした人差し指をあげた。「運命はこう告げている。来週の日曜日午後六時、貴女は教会から低い方の道に通じる歩道の二段目に座っているだろう。そのとき、一人の男性が歩道をやって来る。」スコーガン氏はその情景を詳しく思い出そうとするかのようにもう一度、彼女の手を見た。「男性だ」と繰り返した――尖った鼻をした小さな男で、容姿もあまりよくないし、若くもない、しかし魅力的だ。」魅力的という言葉に力をいれた。「その男は貴女に『天国に行く道を教えていただけませんか？』と尋ねるだろう。そうすると貴女は、『ご案内いたします』と答えて小さなハシバミの林まで一緒に降りて行く。その後どうなるかは、私にはわからない。」沈黙があった。

「本当ですか？」白いモスリンが尋ねた。

魔法使いは肩をすくめた。「ただ手相に現れたことを言ったまでだ。ごきげんよう。六

ペンス載きます。お釣りはありますよ。ありがとう。さようなら。」

デニスはベンチから降りた。柱にゆるく曲がって結ばれていた英国旗が、風のない空に垂れ下がっていた。「あんなことが僕にできたら！」お茶のテントにベンチを戻しに行きながら思った。

アンは長いテーブルの後ろに座って、厚手の白いカップにティーポットからお茶をついでいた。テーブルの上には印刷された紙がきちんと積まれていた。デニスはその一枚を手にして懐かしそうに眺めた。彼の詩だった。五百部印刷したのだが、四つ折りの大判の印刷物は感じがよかった。

「よく売れていますか？」何げなく尋ねた。

アンは言い訳をするように首をかしげた。「まだ三部なの。でもお茶に一シリング以上払ってくれた人には、ただで差し上げているのよ。だからそのうちたくさんの人に渡るわ。」

デニスは返事もせず、黙ってゆっくり帰って行った。大判の印刷物を手にして、歩きながら味わうように読んだ。

メリーゴーランドとブランコ
力試し、ココナッツ投げ、輪投げ
ジェットコースター、パイプ落とし[37]、そのほか他愛もない
どんちゃん騒ぎの今日を、休日と呼ぶのか？
休日だと？　しかし、紙でできた
丸い顔をしたベネチア人の鼻は、
お祭り騒ぎの年の半分を、
造花の薔薇の薫を嗅いで過ごすではないか。
素顔では恥ずかしくなるようなことを、
仮面は笑い、恥ずかしいとも思わない。
休日だと？　だが、ガルバ[38]は
象に綱渡りさせ
ジャンボ[39]は張り綱を渡り
サーカスで武装した男たちが
遊び半分に刺しちがえ、
毎日の労働日を牢獄にして
苦役と服従を強いる
退屈な至上命令を破ろうと死んでいく。
休日を歌え！　お前は知らないのだ。

自由がどんなものかを。ロシアの雪は
真っ赤な血の花を咲かせ、その花びらは
やがて薄れ、再び雪の中に
処女雪の中に消えていく。そして人びとは
いにしえからの束縛から解放され
古い掟、古い慣習、古い信仰、
古い善悪、そのすべてが血に染まって死に絶えた。
凍てつく空気が彼らの息を
消えゆくわずかな煙を迎え
仆れたまわりに雪が薔薇の花を咲かせた。その場所の血は
赤く華やかで美しい。
休日を歌え！純真と自由の樹の下で
紙の鼻と赤い帽子が
魔法の木陰で踊り、魔法で酔わされ、陽気に、力強く
笑い、休日の歌を歌う。
『自由だ、自由だ…！』
だが、こだまは、かすかに
笑い踊っているものたちに答える。
『自由だ』――そしてかすかに笑う。
山の窪みの中で
さらにかすかに笑い、『自由だ』と囁く。
一層かすかになり、やがて消えていく。
『自由だ』そして笑いは消え去る…
休日を歌え！　休日を歌え！

彼は丁寧にその紙をたたんでポケットに入れた。これにはいいところがあった。ああ、絶対ある、絶対！　しかし人びとは何て、不愉快な臭いを放っているんだ！　煙草に火をつけた。牛の臭いの方がましだった。彼は敷地を囲む壁の門を通って、庭園の中に入って行った。プールが騒音と活気の中心だった。

「女子競泳選手権予選第二組」ヘンリー・ウィンブッシュの穏やかな声だった。滑らかなアザラシのような黒の水着姿の一群が、彼を取り囲んだ。波のようにざわめく人びとの中にあって、彼の滑らかで丸い山高帽子だけが、少しも動かない貴族らしい平静さを持つ島のようだった。

鼈甲緑の鼻眼鏡を目の前一、二インチのところに持って来て、名薄の名前を読み上げ

た。

「ドリー・マイルズ嬢、レベッカ・マリスター嬢、ドリス・ギャベル嬢。」

五人の若い女性たちが水際に並んだ。プールの向こう側の来賓席から、老マリン卿とキャラミー氏が興味深そうに見ていた。

ヘンリー・ウィンブッシュが手を挙げた。期待に満ちた沈黙があった。「私が『ドン』と行ったら飛び込みなさい。ドン」彼は言った。ほとんど同時に水しぶきがあがった。デニスは観客を押し分けて進んで行った。誰かが彼の袖をつかんだ。下を見るとバッジ老夫人だった。

「またお目にかかれてうれしいわ、ストーンさん」彼女は豊かでかすれた声で言った。彼女は話しをするとき、少し息がぎれ、まるで息切れする小さなペットの犬のようだった。デイリー・ミラー紙で政府が桃の種を必要としているという記事を読んで——何のためかはわからなかったが——桃の種を集めることを戦争中の彼女独自の仕事の一端にしたのは、バッジ夫人だった。促成栽培のできる温室が四つもあるうえ、庭には三十六本の桃の木があったので、実際のところ一年中桃を食べることができた。1916年には4200個の桃を食べその種を政府に送った。1917年に庭師が三人軍隊に招集され、それに加えて不作の年だったので、国家存亡の危機に際して2900個の桃しか食べることができなかった。1918年はまだましで、一月一日から休戦の日までに、3300個食べた。休戦以来、彼女は努力を緩め今では一日に二、三個しか食べなかった。健康を害したと文句を言っていたが、立派な目的のためだったとも言うのだった。

デニスは、彼女の挨拶にあいまいに、そして丁寧に答えた。

「若い人たちが楽しんでいるのを見るのは楽しいわ」バッジ夫人は続けた。「そう言えばお年寄りもそうね。老マリン卿とキャラミーさんを見てご覧なさい。あの人たちがあんな風に楽しんでいるのも楽しいじゃない？」

デニスは彼らを見たが、楽しいかどうかはわからなかった。何故あの人たちは、袋競争を見に行かないんだろう？　二人の老人は競泳に勝った者を祝福していた。親切にもほどがある。たかが予選に勝っただけじゃないか。

「かわいい娘ね？」バッジ夫人がかすれた声で言い、二、三回喘いだ。

「そうですね」デニスは納得してうなずいた。十六歳、ほっそりとして、しかし年頃、そうつぶやいて、いい言い回しだと思って記憶の中にしまいこんだ。キャラミー老人は眼鏡をかけ勝者を祝福していた。マリン卿は杖に身をもたせて長い象牙色の歯を出して、笑っていた。

「とても上手だ、とても」キャラミー氏が太い声で言っていた。

勝った娘は困ったようにもじもじしていた。彼女は両手を後ろに組んで、落ち着かない様子で片足をもう一方の足にこすりつけていた。彼女は濡れた水着が、きれいに磨か

れた黒大理石のトルソーのように光っていた。

「本当に上手だ」マリン卿が言った。彼の声は歯のすぐ後ろから出てくるようだった。食いつきそうな声だった。まるで犬が突然しゃべり始めたみたいだった。彼らもう一度笑い、キャラミー氏は眼鏡をかけ直した。

「私が『ドン』と言ったら、飛び込むんですよ。ドン！」

バシャ！　水しぶきがあがった。第三組がスタートした。

「私はどうしても泳ぎが覚えられなかったんですよ」バッジ夫人が言った。

「本当ですか？」

「でも浮くことはできたのよ」

デニスは彼女が浮いているところを想像した――大きな緑の波のうねりに乗って上がったり下がったり、上がったり下がったり。膨らんだ黒い浮袋、いや、よくない、全然いい言い方じゃない。新たな勝者が祝福を受けていた。その娘は、話にならないくらいずんぐりしていて、太っていた。前の娘は、背が高く膝から胸までの線がなだらかで、均整がとれていて、クラナハ[40]の描くイブのようだったが、今度のは下手なルーベンス[41]だ。

「…ドン、ドン、ドン！」ヘンリー・ウィンブッシュの丁寧な抑揚のない声がもう一度型通りに繰り返された。新たな一組が飛び組んだ。

バッジ夫人との会話を続けるのに少し飽きてきたので、デニスは案内役としてほかのところにも行かなければならないことを思い出した。見物人の人込みをかきわけて、後ろのあいている道を進んだ。彼がもう一度、自分の魂が蒼白い膜だと考えていたそのとき、頭の上の方でただ一言「いやらしい！」という細い声が聞こえてびっくりした。

彼はきっと見上げた。彼が歩いていた道は、短く刈り込まれたイチイの木の塀の陰を通っていた。生け垣の向こうの地面は、テラスや屋敷の下まで急勾配の登り坂になっていて、高台の方に立つと生け垣のずっと向こうまで見渡せた。顔をあげてみると、真上の生け垣越しに頭が二つ見えた。鉄火面のような顔をしたボディアム氏と、青白い血の気のない顔の彼の妻だった。二人は、彼と見物人の頭越しに、プールで泳いでいる人たちを見ていた。

「いやらしい！」ボディアム夫人はもう一度、低い声で繰り返した。

牧師はその鉄火面のような顔を、濃いコバルトブルーの空に向けた。「いつまで？」まるで独り言のようにつぶやいた。「いつまで？」彼は目をあげデニスが興味深そうに見上げているのに気がついた。びっくりして、生け垣の向こうに姿を消した。

デニスは散歩を続けた。メリーゴーランドを通り、テント村の雑踏の中を歩いた。魂の膜が笑いと喧噪の中で騒々しく、はためいた。綱で囲まれた空き地では、メアリーが子供たちの遊びを指示していた。小さな子供たちは、彼女の廻りに集まり、甲高い叫び声をあげていた。両親のスカートやズボンのまわりに群がっているものもいた。メアリ

一の顔は沸きかえる興奮の中で上気していた。元気よく二人三脚競争をスタートさせた。デニスは感心して見ていた。

「すごいですね」彼女の後ろに近づいて彼女の腕を触りながら言った。

「こんなエネルギー見たことありません」

彼女は素直そうな、夕日のように丸くて赤い顔を彼の方に向けた。金色の鐘のような髪が頭を動かすと音もなく揺れ、かすかに震えて止まった。

「ねえ、デニス」彼女は低いまじめな声で言った、「二年半で三人の子供を生んだ人がいるっていうことを知ってる？」

「へえ」デニスは素早く計算してみた。

「すごいでしょ。マスサス連盟[42]の話をしてあげたのよ。本当に…」

しかし突然、ものすごい金属的な叫び声がして、誰かがレースに勝ったことを告げた。メアリーは再び危険な渦に巻き込まれた。デニスはそろそろ引き上げる時間だと思った。長居すると何か頼まれるかもしれなかった。

彼はテント村の方に戻った。お茶が飲みたいという気持ちが強くなった。お茶、お茶、お茶。しかしお茶のテントはひどく混んでいた。アンは、上気した顔にいつもと違う険しい表情を浮かべて、猛烈な勢いでティーポットを動かしていた。茶色の液体が差し出されるコップに絶えまなく入っていった。テントの向こうの方では、女王様のような帽子をかぶりもったいぶった様子のプリシラが、村人たちを激励していた。一瞬静かになって、太い元気な男性的な声が聞こえた。お茶が欲しい人間のいるところではないと思った。彼は、テントの入口でぐずぐずしていた。すると、とてもいい考えが突然浮かんだ。そっと、人目につかずに屋敷に戻って食堂に忍び込んで、小さなサイドボードのドアを開ければ——ああ、そうしたら！　ひんやりとした奥の方には、酒とサイフォンがあるだろう、水晶のように澄みきったジンとソーダ水が一クォート[43]。それから、元気になって、すっかり身体を酔わせてくれるまで盃を重ねよう…

一分後には、彼は元気よく陰になったイチイの木の散歩道を歩いていた。屋敷の中は心地よく、静かで涼しかった。酒の入ったグラスを慎重に持って、書斎に入って行った。テーブルの端にグラスをおいて、サント・ブーブ[44]の本を一冊手にして、椅子に腰掛けた。乱れた心を落ち着けてくれるのは、『月曜閑談』以外ないと思った。彼の薄い膜は、その日の午後の感情にひどく打ちのめされていた。休息が必要だった。

第28章

夕暮れあたりにバザーそのものは、静かになった。ダンスの始まる時間だった。テント村の一方の端にロープが張られて空き地ができていた。アセチレンランプが柱にぶら下げられ、刺すような白い光を投げかけていた。片隅の楽団の弦楽器や管楽器の音に合わせて、二、三百人の人たちが乾いた地面の上を、足で草を踏みつけながら踊っていた。あたりはほとんど昼間のように明るく、動きも音も生き生きとしていて夜は不自然なくらい暗く見えた。光の縞が暗闇の中にとどき、ときおり、寂しそうな人影や抱き合っている恋人同士の姿が、明るい光の縞を横切って一瞬見えたりしていたが、それもまたすぐあっという間に消えてしまった。

デニスは囲いの入口に立って、体を左右に動かしたり、すり足で踊っている人たちを見ていた。まるで彼が閲兵をしているように、何組かのカップルが、彼の前を何度もゆっくりとした渦にのって通っていった。プリシラは例の女王様のような帽子をかぶって、相変わらず村人たちを激励していた——今度は、小作の農夫の一人と踊っていた。今日のような祭りの日は、正餐の代わりに過越の祭り式[45]の無礼講の食事だったが、マリン卿はその時刻まで残り、おどおどした村の美人を相手に、曲がった足をますます曲げて危なっかしげにワンステップを踊っていた。スコーガン氏は、別の女性とせわしなく踊っていた。メアリーは逞しい体つきの若い農夫の腕に抱かれていた。彼女は目をあげ、一生懸命話をしているように、デニスには見えた。何を話しているんだろう？　マルサス連盟のことだろう。ジェニーは楽団の隅の方に座って、太鼓のすばらしい技を披露していた。目は輝きにっこりと微笑んでいた。太鼓のドンドンという音、長く転がるような音、華やかな音の中に、彼女の秘密の人生のすべてが表現されているようだった。彼女を見ながら、デニスは例の赤いノートを思い出して苦々しく思った。今僕がどんなふうに見えるんだろう。しかしアンとゴンボールドが目の前を通ったのを見て——アンはほとんど目を閉じ動きと音楽の翼に乗って眠っているようだった——この考えはすっかり消えてしまった。神はこれを男と女に造り給えり[46]…あれがそうだ、アンとゴンボールド、何百組ものカップル——神はこれを男と女に造り給えりの古い節に合わせて仲良く踊っている。しかし、デニスはみんなから離れたところに座っていた。不足を補う相手がいなかった。みんな相手がいる、しかし彼だけは…

誰かが彼の肩に触れた。見上げてみるとヘンリー・ウィンブッシュだった。

「君にはまだ樫の木の排水管を見せていなかったね」彼は言った。「掘りあげた一つがすぐそこにあるんだよ。見てみませんか？」

デニスは立ち上がり、二人は暗がりの方に歩いて行った。音楽はだんだん、かすかになってきた。高い音は完全に聞こえなくなった。ジェニーの太鼓とベースのたえず鋸をひくような音が、節も意味もなく彼らの耳に響いていた。ヘンリー・ウィンブッシュは立ち止まった。

「ここだ」そう言ってポケットから懐中電灯を取り出し、地面の窪みにひっそりとおいてある、排水管の形にくりぬかれた木の幹の黒っぽい断面に、薄い光を当てた。

「おもしろそうですね」デニスはあまり関心なさそうに言った。

二人は芝生の上に座った。帯のようになった木の後ろから差し込む、かすかな白い光がダンス場の位置を示していた。音楽は布でくるんだリズミカルな律動に過ぎなかった。「この祭りが終わってしまえばいいんだが」ウィンブッシュ氏が言った。

「そうですね」

「私は」ウィンブッシュ氏が言った、「たくさんの人たちが騒いでいるのを見ても、陽気にもなれないし興奮もしない、どちらかというと、疲れを感じるんですよ。でもその理由はわからないんだ。実際のところ、興味がわかないんですよ。私の性にあわないんです。わかりますか？　例えば、切手の収集にも興味がなかったんです。ルネッサンス以前の画家の作品や、十七世紀の本など――そうだ、それが私の性に合っているんだよ。しかし切手はだめだ。全然わからない。性にあわないんだよ。興味も沸かないし、愛着も感じない。人間に対しても同じなんだ。この排水管と一緒にいる方が落ち着くんだ。」くりぬいた丸太の方を見た。「人間や現在の出来事について問題なのは、それについて何も知らないということなんだ。今の政治について私が何を知っているだろうか？　何も知らないんだ。回りの人たちについて何を知っているか？　何も知らない。彼らが私のことをどう考え、世の中のことをどう思っているか、五分後に彼らが何をしているか想像もつかない。もしかしたら一分後に、君が突然襲いかかって来て、私を殺すかもしれないじゃないか。」

「まさか」デニスは言った。

「確かに」ウィンブッシュ氏は続けた、「君の過去について私の知っているわずかなことは、間違いなく安心するようなものだ。しかし君の現在については知らないし、君も私も、君の将来については何もわからないんだ。恐ろしいことじゃないか。生きている人間を相手にしていると、我々は知らないことや、知ることのできないものを相手にしていることになる。彼らのことを知るには、嫌になるくらいの時間の浪費をともなう不愉快で退屈な人間関係が必要なんだ。現在の出来事についても同じだ。果てしない不愉快な関係を伴うもっとも徹底的な直接的研究に、何年も費やす以外にどうやって彼らのことを知ることができるんだ？　嫌だね、私には過去をくれ。過去は変わらない。過去ははっきりしていて、心地よく上品にそしてとりわけ個人的に――読書によって知ることができる。読書によってチェザーレ・ボルジアや聖フランシス[47]、ジョンソン博士[48]を知ることができる。二、三週間もあればこういったおもしろい人物と完全に知り合いになれる。もし彼らが生きていれば個人的接触という退屈で不愉快な手続きをしなければならないんだ。あらゆる人間関係を排除することができたら、人生は何と楽しく愉快だろ

う！　もしかしたら将来、機械が完全な状態になれば――実を言うと、私はゴドウィン[49]やシェリーのように機械が完全になると信じているんだが――私のように望んでいる者は、上品に引きこもって、黙々とした優雅な機械の細心の配慮をうけて、人間の侵入から完全に逃れて崇高な隠遁生活ができると思うよ。すばらしい考えだろう。」

「すばらしいですね」デニスは納得した。「でも、恋とか友情といった望ましい人間関係はどうなるんですか？」

暗闇を背景にした黒いシルエットは、首を振った。「そういった関係から生じる楽しみさえ随分誇張されているんだよ」丁寧な抑揚のない声が答えた。「それらが、個人的な読書や思索から生まれる楽しさに匹敵するかどうか疑わしいと思うね。人間関係が過去において高く評価された理由は、読書が一般的な教養ではなく、本もあまりなく複製が難しかったからだ。世の中はやっと文字が読めるようになったんだ。読書が習慣化し普及するにつれて、人びとは本というものは社会生活の楽しさを与え、耐えられないような退屈さから解放してくれるということを知るようになるだろう。現在楽しさを求めている人たちは、大勢集まって騒ぐ傾向にあるが、将来は孤独と静けさを求めるようになるだろう。人間が研究対象とするべきものは本だよ。」

「僕もそう思うときがあります」デニスは言った。アンとゴンボールドはまだ踊っているだろうかと思った。

「ところが残念ながら」ウィンブッシュ氏はため息をついて言った。「私は、舞踏会場ですべてがうまくいっているかどうか、見に行かなければならないんだよ。」二人は立ち上がり、ゆっくりと白い光の方に歩いて行った。「もしあの人たちが死ねば」ヘンリー・ウィンブッシュ氏は続けた、「この祭りも非常に楽しいものになるだろうね。上手な文章で書かれた本で、一世紀前の野外舞踏会について読むことほど楽しいものはないよ。何て、おもしろいんだ！とみんな言うだろう。何て美しく、楽しいんだ！と言うだろう。しかし、その舞踏会が現在行われ自分がその中にいると、その真の姿を見ることになる。結果はこの有様だよ。」彼はアセチレンランプの光の方に手を振った。「私の若いころは」ちょっと言葉をきって続けた、「全く偶然に一連の幻想的な恋愛遊戯に巻き込まれたもんだよ。小説家ならそれをもとに一財産作れただろうし、私がその出来事について、たとえ下手な言葉で話したとしても、君はそのロマンティックな話に驚くだろう。しかし言っておくが、それが起きているあいだは――ロマンティックな冒険談――日常生活のほかの事件と同じように、たいしてわくわくするようなものではなかったんだよ。夜中に縄梯子をかけて、トレド[50]の旧家の二階に忍び込むなどということは、実際それをしている最中は、その危険な離れ業も当然のように思えたんだよ――どう表現したらいいかな？――例えば、月曜日の朝八時五十二分サービトン[51]発の電車に乗って仕事にいくようなものかな。冒険とかロマンスというものは、間接的だと、冒険っぽくロマンティック

な性質を帯びてくるんだよ。実際にしてみると人生の一断片に過ぎないんだ。文学の中に現れると、とてもすばらしいものになるんだ、それは、今夜の嫌な舞踏会でも三百年祭を祝っているんだったら楽しいものになるのと同じだよ。」二人は囲いの入口のところまで来て、まばゆい光で目をパチパチさせながら、立ち止まった。「ああ、そうであればいいのだが！」ヘンリー・ウィンブッシュは付け加えた。

アンとゴンボールドはまだ踊っていた。

第29章

十時を過ぎていた。ダンスを踊っていた人たちはすでに帰り、最後のランプが消されるところだった。明日になればテントはたたまれ、取り壊されたメリーゴーランドも荷車に乗せられて運び去られるだろう。踏みつけられた芝生と、広大な芝生の中のみすぼらしい茶色い部分だけがあとに残るだろう。クローム村の祭りは終わった。

プールの端の方に二人の人影が揺らいでいた。

「だめ、だめ、だめよ」アンがゴンボールドのキスから逃れようと頭を左右に振って、体を反らしながら息をきらした囁き声で言っていた。「だめ、いけません」彼女の高い声には命令的な響きがあった。

ゴンボールドは抱擁を少し緩めた。「どうして、だめなんですか？」彼は言った。

「だめということはないでしょう。」

さっと、アンは逃げた。「だめよ」彼女はやり返した。「ずるいわ」

「ずるいだって？」ゴンボールドはびっくりしたように繰り返した。

「そうよ。ずるいわよ。二時間もダンスを踊って、酔っぱらったようにふらふらして、頭がぼおっとして、体がふわふわしているところを襲うんですもの！　お酒か麻薬を飲ませて言い寄るのと同じだわ。」

ゴンボールドは腹だたしげに笑った。「女たらしとでも、何とでも呼べばいい。」

「さいわい」アンは言った、「もうすっかり酔いは冷めたわ、もしキスでもしようとしたら平手打ちをくらわすわよ。プールの回りを散歩でもしない？」彼女は付け加えた、「すてきな夜だわ」

答えの代わりにゴンボールドはいらいらしたような声を出した。二人はゆっくり並んで歩いて行った。

「ドガ(52)の絵で好きなところは…」アンがひどく突き放したような会語口調で話し出した。

「ちぇ、ドガなんか！」ゴンボールドはほとんど叫んでいるようだった。

デニスはテラスのてすりにもたれて、プールの端の月明かりの中に映し出された青白い二つの影を見て、絶望的な気持ちになった。無限の情熱的な抱擁の序幕とおぼしき二人の姿を目の当たりにして、逃げ出してしまった。残酷すぎた、耐えられなかった。次の瞬間耐え切れず涙が溢れてきそうだった。

訳が分からなくなって、屋敷の中に入ると最後のパイプを吸いながら広間を行ったり来たりしていたスコーガン氏とほとんどぶつかりそうになった。

「おや！」スコーガン氏は彼の腕をつかんで言った。ぼおっとしていて、何をしているのか、どこにいるのかもわからず、デニスは夢遊病患者のように立ちつくした。「一体どうしました？」スコーガン氏は続けた。「何か困って、ひどくがっかりして、意気消沈しているみたいですね。」

デニスは何も答えず首を振った。

「宇宙について悩んでいるんですか？」スコーガン氏は彼の腕を軽くたたいた。「その気持ちはわかります」彼は言った。「これはとても難しい問題でね。『何の得があるか？すべては空虚なり。結局はすべてと共に燃え尽きる運命にあるのであれば、生き続けて何の得があるのか？』そうだ。君の気持ちはわかる。自分が苦しんでいるのを認めるのが一番つらいものですね。しかしどうして苦しむのですか？　結局、すべてのことには究極というものがないということを知っているからだろう。しかし知ってどうなるのです？」

このとき、突然、夢遊病患者は目を覚ました。「何ですか？」彼は目をパチクリさせ、しかめ面をして、相手の顔を見ながら言った。「何ですって？」それから手を払いのけて、階段を一度に二段づつ上がって二階に行った。

スコーガン氏は階段の一番下まで追いかけて来て叫んだ。「どっちみち、たいした違いはありませんよ。人生はどんなときでも楽しいものですよ――どんなときでもです」ほとんど叫んでいるみたいだった。しかしデニスにはもう聞こえていなかった、それにたとえ聞こえていたとしても、今夜の彼にはどんな哲学的慰めも役には立たなかっただろう。スコーガン氏はパイプをくわえ直し、考え深そうに歩き始めた。「どんなときでも」彼はもう一度繰り返した。文法的には正しくないが、本当にそうかな？　生きることは本当にそれ自体報酬だろうか。彼は考えた。パイプが燃え尽きてくすぶり始めると、ジンを一杯ひっかけてベッドに入った。十分後には深く無邪気な眠りに陥っていた。

デニスは機械的に洋服を脱ぎ、お気に入りの花柄の絹のパジャマを着てベッドにうつ伏せになった。時が流れた。ようやく顔をあげたときには、ベッドのそばの蠟燭は軸受けのところまで燃えきっていた。時計を見ると、午前一時半近かった。頭が痛み、乾き切った睡眠不足の目は、底を傷つけたように思われ、耳の中では血管の太鼓が大きな音

をたてていた。彼は起き上がりドアを開け、そっと廊下を通って上の階に通じる階段を上がって行った。屋根裏の使用人部屋のところまで来てちょっと立ち止まったが、また右に回って廊下の突き当たりにあるドアを開けた。中は暑く、風通しも悪く、ごみと古い革の臭いのする真っ暗な食器棚のような納戸だった。彼は手探りで用心深く暗闇の中を進んで行った。ここから、梯子が西の塔の鉛板に通じていた。彼は梯子を見つけて足をかけた。頭上の跳ね上げ戸をそっと上げた。月明かりの空が一面に広がった。彼は夜のさわやかで冷たい空気を吸った。次の瞬間には鉛板の上に立ち、ぼんやりと霞んだ青い景色を眺め、七十フィート下のテラスをまっすぐ見ていた。

何故こんな高くて誰もいないところに上がって来たんだろう？　月を見るためなのか？自殺でもするつもりなのか？　わからなかった。死――考えただけで涙がでてきた。彼の惨めな気持ちは、ある種の厳粛さを帯びていた。高揚した魂の翼に乗っていた。今だったらどんなことでもできそうだった、たとえどんなに愚かなことでも。彼は向こうのてすりの方に進んで行った。ここから落ちれば真っすぐ何の障害もなかった。ひとっ飛びで狭いテラスを飛び越えて、三十フィート下の太陽に焼かれた地面にぶつかるだろう。塔の端に立ち止まって、下の暗闇を見下ろしたり、まばらな星やかけ始めた月を見上げたりした。手を動かし、後で何を言ったか思い出せないようなことをつぶやいた。しかし大きな声で口に出してみると、妙に恐ろしい意味あいを持っていた。それからもう一度、下の暗闇を見下ろした。

「何をしているの、デニス？」彼の真後ろから声がした。

デニスはびっくりして大声を上げ、ほとんどてすりから落ちそうになった。心臓がどきどきし、青くなった。そしてようやく気を取り戻して、声のした方に振り返った。

「気分でも悪いの？」

塔の東側のてすりの濃い影の中に、そのときまで気がつかなかった何か――長方形のものがあるのに気づいた。それはマットレスだった。そして誰かが横になっていた。塔での例の記念すべき夜以来、メアリーは毎晩ここで寝ていた。貞節さの証明だった。

「目が覚めたら、あなたが腕を振って何かぶつぶつ言っているんですものびっくりしたわ。一体何をしているの？」彼女が尋ねた。

デニスは芝居がかった笑いをした。「おや、何と！」彼は言った。もし彼女が目を覚まさなかったら、今ごろは塔の下でめちゃめちゃになっていたことだろう。間違いないと思った。

「下心でもあるんじゃないでしょうね？」メアリーは一気に結論を急いで尋ねた。

「あなたがそこにいるとは思わなかった」デニスはもう一度前より悲しそうに、そしてわざとらしく笑った。

「どうしたの、デニス？」

彼はマットレスの端に座り、答えの代わりにぞっとするような、本当とは思えないような笑いをし続けていた。

一時間後、彼はメアリーの膝に頭を乗せていた。メアリーは全くの母性的な気持ちから、彼のもつれた髪を触っていた。彼は何もかも、すべてを彼女に話した。望みのない恋、嫉妬心、絶望、そして自殺のことを――これは、彼女が邪魔をしたので運よく回避できたのだが。二度と自殺などしないと心から誓った。そして今、彼の魂は悲しい安らかさの中を漂っていた。メアリーが寛大に注いでくれる、同情に満たされていた。デニスが安らかさと一種の幸福感を感じたのは、同情を受けたからだけでなく、彼女に同情を感じていたからでもあった。というのは、彼がメアリーに自分の惨めな気持ちについて何もかも話したとき、メアリーもその信頼に答えて自分のことをほとんど話したのだった。

「かわいそうなメアリー！」彼は同情した。しかし、彼女にだってアイヴァーに誠意がないことぐらいわかっていただろう。

「ええ」彼女は結論を出した、「この程度のこと平気でなくてはいけないわね」泣きたいと思ったが、それほど弱くありたくなかった。沈黙があった。

「どう思いますか」デニスは躊躇しながら尋ねた――「彼女とゴンボールドは…本当に…」

「間違いないわ」メアリーははっきりと言った。再び長い沈黙があった。

「どうしていいかわからない」ついに、彼はがっかりして言った。

「帰った方がいいわ」メアリーは忠告した、「それが一番安全だわ、そして一番賢明なやり方よ。」

「でもまだ三週間は、滞在する予定なんだけど。」

「口実を考えるのよ。」

「あなたの言う通りかもしれませんね」

「そうよ」メアリーは動かし難い冷静さを取り戻して言った、「こんなことしていられないでしょ？」

「ええ、嫌です」彼は言った。

至極現実的に、メアリーは口実を考えた。暗闇の中で脅かすように、教会の時計が三時を打った。

「もう寝たほうがいいわ」彼女は言った、「こんなに遅いとは思わなかった。」

デニスは梯子を降り、キーキー鳴っている階段を用心深く降りて行った。彼の部屋は暗かった。蠟燭はとっくに消えていた。彼はベッドにもぐり込み、ほとんどすぐに眠ってしまった。

第30章

デニスは起こされカーテンを開けたものの、睡眠を肉体的快感として意識して味わうことのできるあのうつらうつらした眠気を誘う状態に陥ってしまった。もしドアを激しく叩かれて邪魔されなかったら、この状態であと一時間は眠っていただろう。

「どうぞ」彼は目を開けずにつぶやいた。掛け金がカチャリと鳴り、誰かに肩を激しくつかまれ揺り動かされた。

「起きなさい、起きなさい！」

目をパチパチさせて目を開けると、利口そうな顔をしたメアリーが熱心に上からのぞき込んでいた。

「起きない！」彼女は繰り返した。「電報を打ちに行くんでしょ、忘れたの？」

「そうだった！」彼は布団を払いのけた。彼を悩ましていた人は出て行った。

デニスは急いで洋服を着替えて、村の郵便局まで走って行った。帰って来たときには、満足感でいっぱいだった。彼は長い電報を打った。二、三時間もすれば至急ロンドンに戻って来るようにという電報がくるはずだ。一つの行為が実行に移されたのだった、決定的な手段が取られたのだ――彼は決定的なことはあまりしたことがなかった。満足だった。朝食のテーブルについたとき、猛烈な食欲だった。

「おはよう」スコーガン氏が言った、「少しはよさそうだね。」

「よさそうですって？」

「昨日の夜は宇宙について悩んでいたじゃないか。」

デニスは彼の疑いを笑いとばそうとした。「そうでしたか？」彼は軽く聞き返した。

「悩むようなものがなければいいんだが。そうすれば、私は幸せなんだが。」スコーガン氏は言った。

「人間は行動して初めて幸せになれるんです」デニスは電報のことを考えながら、はっきり言った。

彼は窓の外を見た。大きくて形のいびつな雲が青空に浮かんでいた。木々のあいだを風が吹き、風で揺らいでいる木の葉は太陽の光を受けた金属のようにきらきら輝いていて、すべてがとても美しく見えた。まもなくこの美しさを後にするのかと思うと、一瞬悲しかった。しかし決定的なことをしたのだと思って、自らを慰めた。

「行動」と大きな声でもう一度繰り返し、サイドボードのところに行って、おいしそうなベーコンと魚を取った。

朝食が終わるとデニスはテラスに出て腰掛けたが、宇宙論を戦わせがっているスコー

ガン氏の攻撃に備えてタイムズ紙で大きな砦を築いた。パリパリとした新聞の陰に隠れて、彼は考え事をした。明るい太陽の光の中では、昨日の感情はどこか遠い昔のことのように思われた。月明かりの中で彼ら二人が抱き合っていたのを見たからといって、それがどうしたというのだ？　もしかしたら、たいしたことではないかもしれない。では、たいしたことでもないのに、どうしてあの場所に止まっていなかったのか？　踏み止まるだけの強さ、超然と無関心でいられるだけの強さ、彼女とは単なる友人でいられるだけの強さはあるように思われた。たとえそれだけの強さがないにしても…

「電報はいつ頃来るの？」メアリーが突然、新聞の上から顔を突き出して尋ねた。

デニスは何か悪いことでもしていたかのように、ドキリとした。「わかりません」そう答えた。

「三時二十七分の汽車があるんだけど、それに乗れればいいんじゃないかしら？」

「いいと思います」彼は力なく同意した。まるで自分の葬式の準備をしているように感じた。汽車はウォータール駅[53]を三時二十七分に出発する。供花はご辞退申し上げます…メアリーは立ち去った。こんな風に墓地に追いやられてたまるものか。たまったものじゃない。スコーガン氏が、応接間の窓から物欲しそうな表情でこちらを見ているのに気づき、あわててタイムズ紙を持ち上げた。しばらくのあいだそうしていた。やっと、あたりを見ようと、そっと新聞を降ろしてみてびっくりした！　アンがおもしろそうに、意地の悪いかすかな笑いを浮かべて立っていた。彼女が立っていた――木だった女性が――その優雅な動きは静止していても動いているようだった。

「いつからそこにいたんですか？」口をぽかんと開けて、尋ねた。

「三十分くらいかしら」彼女は明るく言った。「新聞に没頭しているんですもの――夢中だったわ――お邪魔したくなかったの。」

「今朝はきれいですね」デニスは大きな声で言った。勇敢にも、こういった容姿のことを言うのは初めてだった。

アンは一撃を払いのけるように手をあげた。「無理しないで」彼女は彼のそばのベンチに腰を下ろした。彼はとても素敵な、かわいい青年だと思った。ゴンボールドの激しいしつこさには、少々うんざりし始めていた。「どうして白のズボンをはかないの？」彼女が尋ねた。「白いズボンをはいているあなた好きだわ。」

「今洗濯にだしているんです」デニスはそっけなく答えた。彼が会話を本筋に戻そうと考えていたとき、スコーガン氏が突然屋敷の中から出て来て、ぜんまい仕掛けのような素早さで、テラスを横切り、二人が座っているベンチの前で立ち止まった。

「例の宇宙について君と話をしようと思ったので」彼は話始めた。「様々な問題が基本的には分離しているとますます確信してきたんだが…しかしデニス、少し右によってくれないかね？」　彼は二人のあいだに座り込んだ。「アン、君がもうちょっと左によって

くれればいいんだが…ありがとう。分離していると言っていたんだったね。」

「ええ」アンが言った。デニスは何も言わなかった。

書庫で食後のコーヒーを飲んでいたとき電報が届いた。デニスはお盆からオレンジ色の封筒を受け取り封を切りながら、後ろめいた気持ちで顔が赤くなった。「至急帰れ」馬鹿げていた。まるで用事があるみたいだ！　丸めて、何も言わずにポケットに入れてしまうのが一番いいんじゃないだろうか？　顔をあげると、メアリーの大きくて青い陶器のような目がじっと彼を見つめていた。彼は前より一層顔が赤くなって、ひどくあやふやな態度で躊躇した。

「何の電報？」メアリーは意味ありげに尋ねた。

彼は気が動転してしまった。「すぐにロンドンに帰ってこいというんです」彼は電報を見ていまいましそうに眉をひそめた。

「そんな馬鹿な、無理だわ」アンが叫んだ。彼女は窓のそばでゴンボールドと話をしていたが、デニスの言葉を聞いて彼の方にやって来た。

「急用なんです」彼は必死で繰り返した。

「まだ来たばかりじゃないの」アンは抵抗した。

「ええ」彼はひどく惨めな気持ちになって言った。彼女がわかってくれたら！　女性は直観が鋭いはずなのに。

「帰らなくてはいけないんだったら、そうしなければ。」メアリーが決然と言葉を挟んだ。

「ええ」彼はもう一度電報を見て、直観を求めた。「家の用事なんです」彼は説明した。

プリシラは少し興奮して椅子から立ち上がった。「昨日の夜、はっきりとした予感があったのよ。」彼女は言った「はっきりとした予感が。」

「もちろん、単なる偶然よ」メアリーはウィンブッシュ夫人の言葉を無視した。「三時二十七分の汽車があるわ。」彼女はマントルピースの上の時計を見た。「荷物をまとめる時間はあるわ」

「車をすぐ用意させよう」ヘンリー・ウィンブッシュがベルを鳴らした。葬式の準備が整った。恐ろしい、恐ろしかった。

「あなたが行ってしまうなんて悲しいわ」アンが言った。

デニスは彼女の方を振り向いた、本当に悲しそうだった。彼は絶望的に運命だと思った。これが行動、つまり決定的なことをした結果だった。物事をなるようにまかせておけばよかった！　そのままにしておきさえすれば…

「議論ができなくなって残念ですね」スコーガン氏が言った。

メアリーはもう一度時計を見た。「もう支度をしたほうがいいと思うけど」彼女は言った。

デニスは素直に部屋を出た。もう二度と、二度と決定的なことはしないと自分に言い聞かせた。キャムレット、ウエスト・ボールビ、ティンパニー行きの乗り換え駅ニップスウイッチ、スパビン、デラオー。そして色々な駅を通ってとうとうロンドンだ。旅のことを考えるとぞっとした。ロンドンに帰ったら一体何をするのか？　うんざりした気持ちで階段を上がって行った。柩に入る時間だった。

車は玄関に来ていた――霊柩車だ。みんなが彼を見送りにやって来た。さようなら、さようなら。無意識にポーチにあった気圧計をたたいた。針がわずかに左に動いた。突然彼の悲しそうな顔に、笑いが浮かんだ。

「『気圧計は降り、我は去る』」彼は見事な的確さでランドー[50]を引用した。彼はみんなの顔をぐるりと見渡した。気がついたものはいなかった。彼は霊柩車に乗り込んだ。

完

注

テキストは、Aldous Huxley, *Crome Yellow* (Harmondsworth, Penguin Books, 1974) を使用。

（1） Somerset：イングランド南西部の州。
（2） Warwickshire：イングランド中部の州。
（3） West Riding：イングランド Yorkshire 州の旧行政区。
（4） Argyll：スコットランド西部の旧州。
（5） Lacrima Christi：イタリア北部 Piedmont 地方産の辛口の発泡ワイン。キリストの涙の意。
（6） Marsala：Sicily 島近郊で作られる甘口で淡褐色の強化ブドウ酒。
（7） Tuscany：イタリア中西部の州。
（8） mi-Carême：（仏）遊楽日。四旬節（灰の水曜日に始まり復活祭までの日曜日を除いた40日間）第3週目の木曜日。
（9） Gladstone：William Ewart Gladstone（1809～98）英国の政治家、首相。
（10） Mallarmé：Stephane Mallarmé（1842～98）フランス象徴派詩人。代表作は『半獣神の午後』
（11） the four elements：四大元素（地、水、火、風）。
（12） Liszt：Franz Liszt（1811～86）ハンガリーの音楽家、ピアニスト。
（13） Ernest Dowson：英国の詩人。（1867～1900）。
（14） the Anciant Mariner：S. T. Coleridge の詩 *The Rime of the Anciant Mariner* に出てくる船乗りの老翁。
（15） game of bowls：芝生で行う木球競技。木球をジャックという目標のボールの、できるだけ近くに転がす。
（16） Luther：Martin Luther（1483～1546）ドイツの神学者。宗教改革の指導者で聖書をドイツ語に翻訳した。
（17） Caesar Borgia：（1476？～1507）イタリアの枢機卿、陸軍指導官、政治家。
（18） Mohammed：（570～632）アラビアの預言者で、イスラム教の創始者。
（19） Comstock：Anthony Comstock（1844～1915）米国の狂信的な作家、社会改良家。

(20) mass : 細部より画面全体との関連によって形をはっきりさせる色、色調、影などの広がり。
(21) Piccadilly Circus : ロンドン中心部の交差点。中央のエロスの像で知られる。
(22) the Medici : 15～16世紀にイタリア Florence で栄えた名門。美術、文学の保護者。
(23) Bank Holiday : 日曜日以外の法定休日。(New Year's Day, Easter Monday など年8回ある)。
(24) coconut shy : ボールを投げて行うココナッツの実落とし。見世物の出店の一つ。
(25) Bartholomew Fair : 聖バルトロメオ祭日 (8月24日) にロンドンで開かれた大定期市。
(26) Platonic Holiday : 具体的な個々の休日の理想的な形態をさす。
(27) Southend : Southend-on-Sea のこと。イングランド Essex 州南東部、テムズ河口に臨む港市。
(28) Weston-super-Mare : イングランド Avon 州西部の Bristol 海峡に臨む自治都市、保養地。
(29) Ilfracombe : イングランド南西部 Devonshire 州北部の港市。Bristol 海峡に臨む景勝の避暑地。
(30) Last Trump : 最後の審判の日のらっぱの音。世の終わりを告知するため7人の天使が吹き鳴らす。
(31) covert coat : カバートクロス (綾織の紡毛または梳毛地) 製の短く軽い外套で、乗馬や狩猟用の軽快なもの。
(32) Capri : イタリア、ナポリ湾にある小洞窟の多い島で国際的保養地。
(33) toque : 羽根飾りのついたビロードの帽子。特に16世紀フランスで男女に用いられた。
(34) Frith : William Powell Frith (1819～1909) 英国ビクトリア時代の風俗画家。
(35) Esbatana : 古代 Media の都市。Hamadan 古名。
(36) Sesostris : 紀元前20世紀エジプト第十二王朝の王。
(37) Aunt Sally : サリおばさんと呼ばれる木像のくわえパイプを落とす遊び。
(38) Galba : ローマ皇帝。ネロ自害後即位したが暗殺された。(5？B. C. ～A. D. 69)
(39) Jumbo : P. T. Barnum によって1882年に購入され見世物になった大きな象の名として有名。
(40) Cranach : ドイツの画家、版画家。
(41) Rubens : Peter Paul Rubens (1577～1640) フランドルの画家。
(42) Malthus : Thomas Robert Malthus (1766～1834) 英国の経済学者。人口問題を最初に取り上げた。
(43) quart : 液体の単位。2パイント。英国では1.136リットル。
(44) Saint-Beuve : Charles Augustin (1804～1869) フランスの文芸批評家。代表作は、*Causeries du lundi* (『月曜閑談』)
(45) passover : 過越の祭り。ユダヤ人が、エジプトの隷属から解放されたことを記念し毎年行う祭り。過越の小羊、種なしパンと苦菜を食べる。
(46) 創世記第1章27節
(47) St Francis : イタリアの修道士。フランシス修道会の創設者。(1181？～1226)
(48) Dr. Johnson : Samuel Johnson (1709～84) 英国の辞書編集者、批評家、詩人。*Johnson's Dictionary* で知られる *A Dictionary of the English Language* は最初の学問的な英語辞書。
(49) Godwin : William Godwin (1756～1836) 英国の無政府主義者。Shelley を始めロマン派の詩人に大きな影響を与えた。
(50) Toledo : スペイン中部、Tagus 川に臨む都市。ローマ領時代のスペインの首都。

(51) Surbiton：イングランド南東部、Surrey 州の都市。
(52) Degas：フランス印象派の画家。（1834～1917）
(53) Waterloo：ロンドンのテムズ川の南側にあるターミナル駅。
(54) Landow：Walter Savge Landow（1775～1864）英国の詩人。代表作は "Imaginary Conversations"